D.C.II-Long Live Rock'n'Roll-

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｄ．Ｃ．ＩＩ－Ｌｏｎｇ Ｌｉｖｅ Ｒｏｃｋ' ｎ' Ｒｏｌｌ－

【Ｎコード】

Ｎ８２３７Ｓ

【作者名】

尾時山

【あらすじ】

初音島に引っ越してきたギタリスト。「アンジェロ・ラッシュ」とテクニックで変態を見せ付ける！！（ボクのサイトのオリキャラが出てきます）

Prologue

◆◇◆◇◆◇

初音島は、フェリー港。

芳乃さくらに雇われている神威創龍は、外国帰りの転入生を迎えるため、愛車のフェラーリ・４５８で港まで来ていた。

「アイツか……」

フェリーから下船し、ギターケースを持って下りて来る一人の少年。

創龍は、その子の傍まで歩み寄り、少年に話し掛けた。

「こんにちは。ようこそ初音島へ。日本語は解るか？」

「ええ。大丈夫ですよ。ちゃんと解ります」

「よかった、てっきり英語しか話せねェんじゃねェかと思ってよ。名前は……確か……」

創龍がわざと忘れたかのように言った。少年は言う。

「成澤　彰。学園長の友人の孫です」　トランクにギターを置き、彰を助手席に座らせる。そのまま彰を風見学園まで送り届けた。

「転入手続き、済ませなきゃな。事務室はこっちだ」

彰をついて来させ、事務室へと入れる。ちょうど、担当の事務員が彰を見、手続きの紙にサインを促した。

「保護者が成澤　涼太か……。『Ｓｏｒｒｉｓｏ』の店長だろ？」
「はい。ひいおじいちゃんが建てたお店らしいですね」
「９０でも未だに元気だぞ。しかもまだ厨房入ってるっぽいからな」
「マジすか？」
Ｓｏｒｒｉｓｏとは、彰の親族が建てたイタメシ屋である。風見学園の生徒も良く入り、学生向けメニューなども作ったぐらいである。

「俺も良く行くしな。さて、お前ん家にも行くか」
「あ、はい」

学園を後に、再びフェラーリに乗り込む。

「待って待って～！！」

その時に、金髪の少女が、フェラーリに駆け寄ってきた。「さくら？」

創龍が、少女の顔を見る。少女は勝手に助手席のドアを開け、彰の膝に座る。

「な、何？」
「ああ、そいつ、学園長」
「芳乃さくら、亜紀人くんの友達だよ～♪」
「ああ、さくらさん。おじいちゃんのお友達ですね……。随分綺麗な女性ですね」
「嬉しいなぁ♪まあ、亜紀人くんと同年齢だけどさ」
「安心しな彰、精神面は身体と対して変わらん」
「ひどい言い方だね～」
「あはは、でも綺麗なことは確かですよ？」

「お前、優しいな」

彰がさくらと一緒にシートベルトを締めたことを確認し、創龍は車を動かしはじめた。

2

「成澤」という標札が付いた家へ着く。彰はさくらを下ろし、トランクからギターを取り出した。２シーターは不便だ。

彰がインターホンを押す。中からは、中肉中背の、中年男性が出てきた。

「おお、彰くんか！」
「お久しぶりです、おじさん」

「Ｓｏｒｒｉｓｏ」２代目店長・涼太が出て、彰を迎えた。

「ひいじいちゃんは？」
「店出てる」
「僕の荷物は？」
「ああ、下のスタジオに入れといたよ」
「スタジオなんてあんのかよ」

ただの一軒家だと創龍はずっと思っていた。まさか、スタジオがあったとは。

「兄さんからのプレゼントも受け取ってるんだ。ほら」
「おお……」
一本のギターを受け取る。黒の貼りメイプル、ラージヘッドのフェンダー・ストラトキャスターだ。

「６９年製の完全オリジナルだね。リッチーイメージだろうねぇ」
「リッチー好きなのか？俺も好きだぜ」

「あの人は本当に凄いですからねぇ」

創龍が笑いながら言う。彼もリッチー・ブラックモアをリスペクトして、白のストラトキャスターを買ったぐらいだ。

「とりあえず、中に入りましょうか」

「いや、俺はいい」

「そうですか？じゃあ、明日――」

「あれ、創龍さん？それに、学園長まで……」

「うわ、めんどくせェ」

創龍が帰ろうとすると、隣の家から、赤い髪の女の子が出て来た。

「どなたですか？」

「学園の生徒。白河ななかっつぅ、めんどくせェヤツだ」

「めんどくせえってなによ！？」

「言葉通りだぜ」

「あ、成澤　彰っていいます。よろしく」

「白河ななかですっ♪確か、亜紀人さんのお孫さんだよね？」

「じいちゃんのこと知ってんの？」

「だってプロじゃん。世界的に有名だよ？」

「確かにばあちゃんと世界飛び回ってたけど……」

お前、自分のじいさんのことも知らねェのかよ、と創龍がツッコんだ。

「まあ、とにかく。明日から学校な。１０月だが、もう寒い。風邪気ィ付けろよ」

「はい、ありがとうございました」

「あ、君は学ランじゃなくていいよ～♪まだ買ってないだろうから、

特別！」
「はい」

3

「んで……。白河さん？」
「ななかでいいよっ。私も彰くんって呼ぶし」
「ななかちゃん？」
「呼び捨てでね！」
「ななか？」
よくできましたー、と、子供をあやすように彰に言った。

「おお、やっぱり彰くんはモテるなぁ」
「そんなんじゃないって。友達作っただけでしょ」
「そう言うけど、結構かっこいいじゃん、彰くん」
「そう言われて、悪い気はしないけどさ」
彰が困ったように言った。

こんなことを言っていても、何も意味はない。彰は、自分のギターを置くため、家に入った。

「あ、待ってよぉ」
「いや、ギター置くだけなんだけど」
「ついでにギター聞かせてよぉ」
「だってさ。聞かせてあげなよ」「解ったよ……。でも、笑わないでね？」
「笑わないよ！」

彰とななかが成澤家に入る。地下室へと続く階段を降りながら、ななかが言った。

「地下室なんてあるんだね……」

「じいちゃんが昔使ってたんだってさ。完全防音のスタジオなんだ」

ドアノブを捻りながら答える。扉を開けると、そこには、大量の機材があった。

「ふむふむ……。スタックも何も積んでない、と」

ギターケースを降ろす。すかさずななかがそれを開けると、白いストラトキャスターが出て来た。

「うわぁ……。綺麗……」

フェンダーＵＳＡ純正のストラトだ。ラージヘッドに、スキャロップ加工のネック。ピックアップは、シェクターのＦ－５００Ｔが二つ搭載され、センターはダミーになっている。

「ま、それがメインギターではないけどね」

スタックを組み終えた彰が言った。ヘッドアンプがマーシャルの２００Ｗ、キャビネットは上下とも１９６０と、マーシャルのフルスタックである。

「メインは決まってないけど、気に入ってるのはこれかな」

十数個ある中のギターケースから、レザー張りのストラトキャスターを取り出す。今度はＤＥＡＮ製のギターだ。

「マイケル・アンジェロ・シグネチャー。こいつに……」

アイワのオープンリールデッキと、ＢＯＳＳのオクターバーを繋

いで、アンプに直結する。

「Ｎｏ　Ｂｏｕｎｄａｒｉｅｓでもやるか……」

「いえーい！！」

ななかがはしゃぎはじめる。彰はそれを見ながら、指を動かした。

「全ての音が聞き取れるかな？」

言った途端、ゆっくりしたテンポにも関わらず、高速で弦を弾いた。

「は、はあっ！？」

ななかには指が見えない。それほど高速でピッキングしているのだ。

一音一音の粒立ち、クリーンさも相当なものだが、それよりも、速弾きが凄過ぎる。

凄まじいピックアップの切り替えと、スウィープでのいきなりのテンポアップに、ななかはただただ驚くしかなかった。

「ここから本番っ！」

今までも本番だろう、とツッコミたかったが、驚きすぎて口が開かない。　しかし、彰の”本番”に、さらに驚かされることになろうとは、予想もしていなかった。

ネックに左手を高速で叩き付けている。下から、上から、交互に。

最早大道芸だろう、とななかは思った。

「4

「あ、笑わないでくれたんだ」

彰の声に、笑う間さえなかった、と言うななか。少し呆然とし、呟く。

「あんなの笑えるわけないって……。むしろビックリするよぉ」

「そう？」

ハンマリングのみでピロピロとギターを鳴らす。呆れる程速く。

「速弾きしか印象にないよ……」

「だって、僕の大半は速弾きで出来てるし」

それでも、レベルが違う。一般的に聞く速弾きよりずっと速い。

「でも、ちゃんと基礎が出来ないと、これは出来ないよ」

「いや、基礎出来ても、あれは……」

ネックに叩き付けているような技術のことを言っているのだろう。その問いにも彰は答えた。

「ラッシュでしょ？練習すれば誰だって出来るよ」

「無理だって！！」

「出来るよ、諦めなければ」

ふふっ、と笑う。嘘だ、とななかは思った。

「人間、何でも練習すれば出来るようになるよ」

――本心で言っているのかな？

ななかは彰に近寄り、彰の手を握った。

「何？」

「本当に思ってるんだ……」

「当たり前でしょ」

ななかは、人に触れることで、その人の心が読める。　その力を使って、彰の心を読んだのだが、彰は全て、心に思ったことを言っていたのだ。

「じゃ、私にも出来るよね？」

「うん。練習、サボらなければね」

「私に教えてよ！私もギター弾きたい！」

「いいよ」

にこっ、と笑って彰は答えた。

「ギターやるんなら、ギター一方あげるよ。流石にこれと、あの白いのと、さっきの黒のはあげられないけど」

「じゃあ、あのギターがいい！」

壁に掛けてあった、フェンダー製のストラトを指差す。

ピックアップはオリジナルのシングルが３つで、色はキャンディアップルレッド。ラージヘッドとブレッドトラスロッドという、７０年代生産のモデルだ。

メイプル指板のフラットなR。フレットはジム・ダンロップの大きな物に打ち変えられていた。

「いいよ。持って行きなよ」

脚立に乗り、そのギターを取ると、ななかに手渡す。

「アンプもいるよね。あとエフェクターか」

綺麗に積み重ねられていたアンプから一つ取り、そのよこのガラスケースから、エフェクターを2、3個取り出す。

「アンプはマーシャルね。まあ、僕はマーシャルとエングル以外持ってないけど。あと、エフェクターは……。これは、ななかの好みで選んでもらうから」

所謂、歪み系のエフェクターを、マーシャルのアンプにセットし、ななかにあげたギターに繋ぐ。

ななかにピックを渡し、弾くように促した。

「これがクリーントーン。それで、これが」

黄色のペダルを踏むと音が変わった。歪みをかけたのだ。

「オーバードライブ。こっちがディストーション」

オーバードライブを外し、黒のマーシャルペダルを踏み込んだ。先程より、高音が強調された歪みになった。

「最後がファズ。かなり汚い歪みになるけど」

言葉通り、汚い音が出始める。歪みきって、最早音がわからない。
「気に入ったのはどれかな？」
ななかは、うーん、と言い、ペダルを色々と変えながら弾いた。
「やっぱ、これかな」
マーシャルのディストーションを踏み、ペコペコと弾く。彰は了解、と笑いながら、ボリュームをゼロにし、オーバードライブとファズを外した。
「なかなかセンスあるね。ヘヴィメタルの素質あるかも」
「ヘビメタ？」
「僕も、ハードロックとか、ヘヴィメタル弾く人間だしね」
「へぇ～」
ピロピロと自分のギターを弾きながら言った。
「んで、明日からでもいいよね？教えるの」
「うん。ありがと」
「お礼を言われるほどの事じゃないよ」
「でも、ギターとか貰ったし……」
「そのギター自体が貰い物だからさ、気にしないで」
彰は笑った。ちなみに、彼のギターは貰い物が多い。
「じゃ、私帰るね。本当、ありがと」
「はいはい。また明日ね。学園でもよろしく」
「うん！」

地下室から玄関へとななかを見送ると、彰はまた地下室へ篭った。

主人公説明

主人公設定

名前

・成澤　彰

年齢

・１５

誕生日

・２／２３（アンジェロ先生と同じ日）

身長

・１７５ｃｍ

体重

・６０ｋｇ

髪型

・２０１１年現在のアンジェロ先生と同じ

演奏可能な楽器

・ギター

・ベース

・キーボード

・ハモンドオルガン

・ドラム

・ピアノ

・バイオリン

・フルート

・トランペット

主な演奏スタイル

・速弾きとクラシカルフレーズアレンジ、変拍子など

影響を受けたアーティスト
・マイケル・アンジェロ
・リッチー・ブラックモア
・イングヴェイ・（●３●）・マルムスティーン
・スティーヴ・ヴァイ
・ポール・ギルバート
・リッチー・コッツェン
・ケリー・キング
・マーティ・フリードマン
・ジョン・ロード
・ドン・エイリー
・コージー・パウエル
・ビリー・シーン
・ティム・ボガード

使用楽器
↓ギター
ＤＥＡＮ　ＭＡＢモデル
ＤＥＡＮ　ツインギター、クワッドギター、シックスギター
Ｆｅｎｄｅｒ　ストラト（主にラージヘッド）、テレキャス
Ｇｉｂｓｏｎ　レスポールカスタム、フライングＶ、エクスプローラ、ＳＧ
ＰＬＡＹＴＥＣＨ　ストラト
Ｉｂａｎｅｚ　ＲＧ３５０ＥＸＺ　Ｂｌａｃｋ　ＰＧＭ－ＦＲＭ
ＡＲＩＡ－ＰＲＯＩＩ　ＸＸ－ＤＬＸ

↓ベース
Ｆｅｎｄｅｒ　プレジション
Ｒｉｃｋｅｎｂａｃｋｅｒ　４００３

↓エフェクター
ＡＩＷＡ　ＴＰ－１０１１
ＢＳＭ　ＲＰＡ　Ｍａｊｏｒ
他は適当

↓アンプ
Ｍａｒｓｈａｌｌ　Ｍａｊｏｒ　１９６７　２００Ｗ＋１９０６０
ＡＢ
ＥＮＧＬ　ＳＡＶＡＧＥ
Ｍａｒｓｈａｌｌ　Ｖｉｎｔａｇｅ　Ｍｏｄｅｒｎ　２４６６
Ｍａｒｓｈａｌｌ　ＪＣＭ８００　２２０３
Ｍａｒｓｈａｌｌ　１９５９性格
・陽気、人の真似をすることもあるが、自分なりのユーモアを入れる

↓詳細
「アンジェロラッシュ」を完全にコピーした男。

祖父の成澤亜紀人（ＨＰ参照）よりギターが上手く、また楽器がマルチな為、亜紀人のバンドのサポートとして参加していた。

音楽理論を独自に学んだりしてプレイに織り込む。

両親は祖父のバンドのマネジメントをしている。

彼が初音島に来た理由は、祖父が過ごした地で生活してみたかったから。

上述の通り、アンジェロラッシュを会得、更にダブルギターやクワッドギター、更には左右対象にネックが６本あるシックスギターま

で作り出した。
勿論アンジェロマウンテンも出来る。

彼は演奏中に何度か変身（速弾きやアレンジ）をし、またノイズをクビにする。（笑）

速弾きだけじゃなく、ちゃんとメロディアスなフレーズやハーモニクスもやれる。しかも自在に。
タッピングハーモニクスなども彼には屁でもない。

その超絶技巧から、人類超越とまで言われ、最終的には
「アンジェロ星から来た宇宙人」
とまで言われる。本人は時々それをネタにする。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　１　登校

「いってきまーす」

翌朝、彰はギグバッグを背負い、アンプケースを持って家を出た。勿論、勉強道具はバッグに重ねてあるリュックサックに詰め込んである。エフェクターと共に。

隣から、ななかと一緒に、オレンジ色の髪をした女の子が出て来た。ななかは眠そうであくびをするが、彰に気付くと彼に挨拶を交わした。

「誰？その子？妹？」

「幼なじみの、月島小恋っていいます。成澤彰くんでしょ？」

「うん、ななかから聞いた？」

「いやいや、音楽雑誌見てれば解るって～。だって、成澤亜紀人さんのお孫さんで、サポートメンバーで入ってたし」「ああ～。確かに取材が結構来たねぇ。ベースとか、ギターとかやってたし、ばあちゃんにキーボード教わってたし」

小恋と話が盛り上がる。ななかはへぇ～、と声を上げた。

「それはギターでしょ？どんなの使ってるの？」

「ＤＥＡＮのマイケル・アンジェロモデルがメイン。後はＦｅｎｄｅｒ純正のストラトとか」

「ギター速いんだよ～、彰くん」

歩きだし、ギターの話へと移行した。彰は続ける。

「ストラトの他には、ジャガーとか、テレキャスとか、エクスプロ

ーラーとかかな。あとは、じいちゃんから貰ったレスポールカスタムと、アリスティデスの０１０」
「ほぇ～……。アリウムまで……」
「あれは半世紀経っても使えるギターだよ。勿論、ベースも０５０持ってるし。ま、メインはビリー・シーン風改造プレベとか、リッケンの４００３とか」
「高いのばっかだ……」
「うん、全然わからない」

ななかの頭がこんがらがる。唯一判るのはストラトぐらいだ。

「昨日は貼りメイプル指板の６９年製のストラト貰ってね。そんで、７３年製のストラトをななかにあげたんだ」
「ななか、そんなの貰ったの！？」
「う、うん……」

大きな声でななかに聞く。価値を知っている小恋だからなのだろう。ズブの素人であるななかには、なにもわからない。

「因みに、それはいくらくらいで？」「貰い物だからわかんないけど、４０万は超えるんじゃない？キャンディアップルレッドだから、レアカラーだし」
「ほぇぇ……」

つまりはヴィンテージ・ギター。しかも状態はフルミント（最高）だ。額を聞いて、ななかも驚いた。彰は苦笑いしながら言った。
「貰い物だから気にしないでいいよ。僕、結構貰うし」「さすが、その道の人……」

驚きは止まることを知らない。彰はピックを取り出して言う。

「ピックも貰うよ？僕は五角形の本鼈甲を使うんだけどね」
「１０００円位するよね、そのピック」
「うん。家にいっぱいあるけどね。っていう訳で、ピックあげるよ。月島さんは指弾き？ピック弾き？」
「うーん、ピック弾きなんだけど、指弾きもチャレンジしたいなぁ」
「じゃ、フィンガーピック三個あげるよ」

ポケットから本鼈甲のサムピックを三個取り出し、渡す。ななかにも、ホームベース型のピックを渡した。

「クリアなトーンが特徴だよ。かなりいい引き心地なんだ。指弾きはアタックが簡単に得られるしね」
「成る程〜」
「分かんないよぉ……」
かなりいい引き心地なんだ。指弾きはアタックが強く得られるしね」
「成る程〜」
「分かんないよぉ……」
「音の立ち上がり、って意味だよ。つまり、出す最初の音が力強く得られるんだ」
「へぇー」
何となく分かった気がする。今度ちゃんと教えるね、と彰は言った。

「さて、さっさと行きますか。遅刻したくないし」
「そうだね」
「ってか、もう着くし」

目の前には、昨日と同じ、大きな校舎がそびえ立っている。

何故か冬でも咲いている桜並木。その中を歩く三人に、近づいて来る人が６人程いた。

「2

「あら、小恋に白河さんと……」
「誰、その男の子？」

小さな少女と、スタイルがいい少女、そして一見したらチャラ男な少年に、不気味な雰囲気を醸し出す少年。そして、濃緑の髪をした少年に、昨日会った創龍。

「オウ、彰か。小恋とも仲良くなったのか」

創龍だけ学ランではない。昨日と同じ黒いコートだ。

「マジモンの成澤彰じゃんか！！創龍さん、何でこんなとこに……」
「何だかんだ有名なんだね、僕」
「当たり前だろ！！ヤンギの表紙何回飾ってんだよ！！」
「しかもギター装備済みか。流石ギタリスト、というところか」

彰は困った顔をし、創龍を見た。

「どう受け答えすれば……」
「自分で考えろや。トーク下手か？」
「成澤……、ああっ！義之君が良く言ってる人か！！」
「夢のご対面ね」

知らねェ、と創龍は呟いた。義之が補足を入れる。
「ＸＪＡＰＡＮのギタリスト候補だった人ですよ。若すぎるからってＳＵＧＩＺＯが入りましたけど。後は、成澤亜紀人さんのお孫さんで……」

「てかお前、ＸＪＡＰＡＮ聞くのか……」

別のところに驚く創龍。明らかにズレている。

「サイン下さい！！」

「いいけど……。取り敢えず校舎入ろうよ。遅刻しちゃうよ」

「俺が権力使って遅刻じゃなくしてやるよ」

「あ、教師なんですか？」

「まあな。この義之と、チャラ男の渉、んで変態の杉並と、杏に茜に小恋は、俺のクラスだぜ」

「へぇ～」

彰は適当に相槌を打った。ななかとクラスは違うのか、と自分の中で理解する。

「もともと別の教師が担任だったんだが、急に体調が悪くなっちまって入院しちまったんだ」

「このクラス、楽だよ」

「確かにやりやすそうだね」

小恋が付け足す。彰は笑みながら返した。

「そういや忘れてた。お前はななかのクラスだ。詳しくは職員室行ってみな。案内するぜ」

「よろしくお願いします」

彰が笑みを絶やさず言った。

この少年、顔立ちは綺麗で、しかも性格もかなり良い。女性陣は彰を語りはじめた。

「あの子、イケメン過ぎ……」
「こりゃ、小恋ちゃんも惚れるかも～！！」
「少なくとも、腕には惚れてるよ。あのギターテク、ベーステク、どれをとっても超一流だし」

小恋いじりが楽しみな小柄な少女・杏と、特に胸が中学生とは思えないくらい成長している少女・茜が、いつも通りイジろうとしたのだが、まるでイジれていない。

「やべぇ、ビックリしすぎてチビりそうだ……」
「俺もだよ、渉。ビッグスターと話せるなんて……」

義之と渉が意気投合する。ななかは終始頭に「？」が浮かんでいた。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　２　対面

「じゃ、着いてきてね」

創龍の案内で職員室に着き、担任の教師の背中を見ながら教室へと歩いていく。

それにしても、この校舎は広すぎる。絶対、何度か迷うだろう。

教室に着く。担任がドアを開けると、大歓声が響き渡った。

「せんせー！早く成澤くんを！」

「皆知ってるのかよっ！！」

彰はびっくりした。いや、彰だけでなく、担任もだろう。

「しょうがない、準備はしとくか……」

ギグバッグを開け、革のストラップをＦｅｎｄｅｒ製のラージヘッドのサンバースト・ストラトに着ける。スキャロップの貼りメイプルネックに、ＳＳＳのレイアウト。トラスロッドの穴は見えない。また、ピックアップは完全オリジナルで、ゴリッとした、パワー感のある音。どうやら、６９年製らしい。

ペグはシャーラーのＭ６Ｎ。チューニングの安定度は抜群だ。

「行くかっ！」

教師が先に入り、その後に彰が駆け込んで入る。アンプとエフェクターを置くと、まずは速弾きで皆の耳を潤す。

「来ったぁっ！！」
「どうも、成澤彰です。今後よろしくお願いします」
「白河さんの師匠だぁぁっ！！」
「もう喋ったのかよっ」

ふふっ、と笑う彰。そして、真ん中辺りに座っているななかにウィンクをすると、ピッキングをしながら喋りはじめた。

「近所の子は白河ななか。昨日ギターをあげました。７３年製、フェンダー純正のストラトに、マーシャル製のディストーションペダル」
「うぉぉっ！？」

徐々にピッキングのスピードを上げていく。しかし、彰はギターを見ずに、前を向いた。

「因みに僕はトレブルブースター派です。それに、テープエコー、ディレイ、オクターバー、ノイズサプレッサーとか。時々フランジャーも使います」
「訳解んねえ……」
「だよね。ギターやってる人しか解らないもんね。だから、曲弾きましょう」

アンプ側のゲインを弄り、ボリュームを上げた。
因みにアンプはＭＡ１００Ｈ。マーシャルのフルチューブのヘッドアンプだ。

ぎゅいいん、と歪んだ音を聞かせる。そして、ハンマリングをし

ながら曲を紹介した。

「Ｙｎｇｗｉｅ　Ｍａｌｍｓｔｅｅｎで、『Ｎｅｖｅｒ　Ｄｉｅ』」

2

「Ｎｅｖｅｒ　Ｄｉｅ」。イングヴェイ・マルムスティーンのアルバム「セヴンス・サイン」に収録されている、イングヴェイの代表曲の一つだ。

ところどころクラシックとダークネスな雰囲気を感じさせるこの曲は、彰のお気に入りの一つだが、ギターで弾くには難易度がかなり高い。イングヴェイ・マルムスティーンの曲は、全体的に難易度が高く、この曲はまだ易しい方なのだが、それでも一般的には難しい部類に入るだろう。

イントロから歌メロに入り、大分簡略化してソロに入った。　１弦のハイフレットのチョーキングビブラート。かなり音を揺らし、それでも音は切れることなく鳴っている。

それから即座に入るスウィープ奏法。３弦から１弦へのエコノミーピッキング、そしてハイフレットからローフレットへ。

クラシカルなフレーズは、レガート（滑らか）を意識して弾く。より美しく、繊細に表現する。

ピックアップの切り替えも凄まじい。高音域を強調するため、フロントからリアへ切り替える時も、自然に変えている様にしか感じられないほど、軽々とやってのける。かなりのテクニックが無いとこれは出来ない。

流れるように鮮やかなピッキングから、タッピングを使いアレンジをする。複数の音を混ぜた、ピアノの様な音だ。

音の粒立ち、ノイズの少なさ、それを作り出すピッキングの正確さ。ピッキングが上手ければ上手いほど、音の粒は揃うし、ノイズも少ない。

ビブラートをかけ、ローフレットにグリスしていき、曲を終えた。彰は身体からギターを離し、手に持ちながら、礼をした。

席で見ていたななかは、昨日と違うプレイを見て、とても面白そうな顔をしていた。

3

演奏が終わり、アンプの電源を落とし、ギターからシールドを抜く。クラスが驚愕で声が出せず、ただその行動を見ていただけだった。

「先生、僕の席……」

「あ、ああ！！白河さんの隣で！！」

言われた通り、ななかの隣の空席に移動する。ななかに、よろしく、といって、椅子に座った。

「昨日のあれ、やんないの？」

「ラッシュはあの曲には合わないからねぇ。クラシカルにやる曲だから」

「そういえば、かなり綺麗な音だったね」

「歪みも少なくして、弾き方も変えただけなんだけどね。でも練習すれば簡単に出来るようになるよ」

「凄いなぁ……。努力の鬼だねぇ」

「何事も上手くやるには練習、練習、練習だよ」

マイケル・アンジェロの言葉を使ってななかに言った。練習は確かに大切だ。そして、練習の内容も大切だ。

「そういや、ギターの練習、いつやる？」

「うーん、今日の放課後辺りにでもやりたいなぁ」

「ギターは持ってきた？」

「ないです……」

「じゃ、家に帰ったらやろっか。僕の部屋でいいよね？」

「うん！そっちの方がやり易そうだしね」

ななかは笑って言った。彼女の笑みに、周りの男子が見とれるが、彰は普通に笑い返した。
女子が彰に見とれ、ななかを羨ましく思った。なんでななかが彰の隣なのか、と。

「ほい。そんでは今日のロングはクリパの出し物決めだよん。もう大体決まっちゃってるけど」

教師は職員室に戻り、学級委員が前に立った。

「やっぱり、成澤くんをメインにした、クラスでのセッションをやりたいよね」
「セッションって、僕以外に誰か楽器やんの？」
「じゃ、私ボーカルで！」
「ま、自動的にそうなるでしょうねぇ」

ななかは真っ先に手を挙げて言った。彰はななかの歌に興味を持ち、彼女に聞く。

「なんか一曲歌ってみてよ！聞いてみたいな」
「うん、いいよっ！」

ななかが元気良く返事をし、歌いはじめた。

「君のことを思ってるのに、届かない想いを重ねて♪」

彰はストラトを手にし、即興でコード演奏し、雰囲気を出した。
完全なクリーントーンで、優しい音色を出していく。

「もどかしいよ、この気持ち、せつなくて涙がひらり♪」

段々とその曲のイメージが伝わって来る。ストラトの、パワーがありつつも、優しくきらびやかなトーンに、美しい歌声を乗せるななか。

一人だけの教室、卒業式の後、寂しげだが、どこか明るさが満ち溢れている。

「いい曲だ……」

「感動した……」

クラス全員の心に響き、皆がほろりとなる。

「上手いなぁ～。僕、メタルとロックしか歌えないから、ブルースとかポップはあまり……」

「ロック？やってみてよっ♪」

ロックと言っても、彰の場合はハードロックだ。一回シールドを抜き、先程のエフェクターをセットし、Ｄｅｅｐ　Ｐｕｒｐｌｅの『Ｂｕｒｎ』を弾き始めた。

「おいおいマジかよ、路線が一気に変わったよ」

「いや、でもこのメロディーかっこよくねえか？」

「って、タマ○ームか！」

Ｄｅｅｐ　Ｐｕｒｐｌｅは3期、黄金期と呼ばれる第2期メンバーの、ヴォーカルのイアン・ギランとベースのロジャー・グローヴァーが離脱し、デイビット・カヴァデールとグレン・ヒューズという、素晴らしいヴォーカリストが加入した頃の曲だ。グレン・ヒュ

ーズはベースも兼任していた。

「The sky is red, I don't understand!!
Past midnight I still see the land!!
People are sayin' the woman is damned, She makes you burn with a wave of her hand!!」

中音域の声が良く出ている。ななかとはまた違う上手さだ。

「The city's a blaze, the town's on fire!!
The woman's flames are reaching higher!!
We were fools, we called her liar!!
All I hear!!」

ブレイクで溜め、彰がピックでボディを3回叩き、一気に放出した。

「Is "BURN"!!」

決め台詞のヴィブラート、太さ、どれを取っても素晴らしい。また、ギターも忠実にコピーしていた。

「っと、こんな感じ」

ソロまで行かずに終わる。ななかが、成る程、と頷いた。

「つまり、ハードロックとヘヴィメタルは、ヴィブラートと大きな声なんだ。演歌みたい」

「本当。演歌とヘヴィメタルって、似たような曲も多いし」

意外だ。演歌とヘヴィメタルは雰囲気も同じな様に思えてくる。ななかは、自分向きな曲ではないが、それでも、面白そうなジャンルである、と感じた。

「決めた！ヘヴィメタル歌う！」

「マジか！！そりゃ嬉しい！！」

「面白そうだし、興味湧いてきちゃった♪」

彰とななかの仲が更に深まった。ヘヴィメタルとは、こんなにも人を繋ぐ力があるのか、と彰は思った。

4

◆◇◆◇◆◇

ちょうどクラスの出し物が決まったところで、休み時間のチャイムが鳴った。クラスの出し物は、「ポップとメタルの融合を試みたセッション」、通称「ポプメタセッション」になった。

もちろんギターは彰が弾いて、ボーカルにななかを起用し、メタルな感じを演出しつつ、ななかがポップな曲を歌う構図になっていた。

他のクラスメイトは、テンポが判るように電子音のビートを取ったり、ななかのコーラスに入ったりという役割になっている。

また、この出し物をやる際に、客に飲み物や軽食を提供することも決定した。勿論協力はＳｏｒｒｉｓｏ。ただ、作り方を教えるだけだが。

他クラスから、たくさんの生徒が彰を訪ねてきた。朝に会った義之や渉、小恋、杏、茜もその中にいた。

「ねえ、なんで私服なの？」
「いやあ、学ラン買う暇なくてさぁ」
「というか、それライブで着てたやつじゃん！」
「そんなの覚えてないよー」

笑いながら受け答えする。本人自体、何を着るのかはあまり意識していない。

「な、成澤師匠！サイン下さい！」
「あ、君は朝一緒にいてくれた……。義之くん、だっけ？あと、渉くんに、杏さんに、茜さん」
「覚えてくれたんですか！光栄です！！」
「いやいや、君達こそ僕を知っててくれて、本当嬉しいよ。サインだよね？あまり書いたことないから、へたっぴだけどいいよね？」
「もう全然大丈夫っす！！」

準備良く色紙を3枚出された。
2枚なのは判るが、後の1枚は誰なのか解らない。

「よろしくお願いしますっ！！」
「お、音姉っ！？」
「え？お姉さん？」

ポニーテールの、本校生の証の制服を着た少女が、義之の隣に現れた。

「生徒会長の朝倉音姫ですっ！大ファンの一人ですっ！」
「ちょ、ええっ！？」
「こりゃまた凄い人が来たもんだねぇ……」

色紙を取り、マジックでサラサラと書きながら言った。

「てか音姉、メタル聞くんだ……。あ、この人、幼なじみで、年上だから音姉って呼んでます」
「メタル好きだよっ！！でも、成澤くんの泣きのギターメロディが素敵でね♪」
「ブルージーテイストの曲も相当練習しましたからねぇ。音楽理論と、スケールを考えたフレーズで、良いものが出来上がりましたか

ら」
「すげぇ……。って、使ってるギターもすげぇ！！」
義之が、机に立てかけてあるストラトを見て言った。因みに、彼もギターを弾くので、ギターの価値が判る人間だ。
「ロッドの穴が無くて、ロゴも新しいの……。６８か９年製か！」
「９年製だよ。鳴りがとてつもなく良いよ」
「でしょうね！ピックアップもノーマルですか？」
「うん。てかさ、タメなんだから敬語やめない？」
「いやぁ……。自然と敬語になりますよ……」
「お願い、敬語やめて♪」
「あ、ああ！」
満面の笑みで頼んだ彰を断れなかった。義之は内心ドキドキしながら、敬語をやめた。
「すげぇ……。俺、今成澤彰とタメ口で話してるよ……」
「それが自然でやりやすいんだ。ななかは最初から敬語使ってないから、更に話しやすいし」「なんとまあ……」
「？なんかまずかった？」
「いや、なにもおかしくないよ」
むしろななかが正しい、と彰は言った。
「そういうわけで、フレンドリーに接してね。朝倉先輩も、よろしくお願いします」
「うん、よろしくね、成澤くん」　彼が望む、一番やりやすい形になった。彰は笑う。

彰の笑顔を可愛く思った女子達が、少し顔を赤くしながら笑み返した。

「うっわぁ……、イケメン……」

「女の子の心を掴みすぎ……」

彰の近くのななかや音姫、そして雪月花達だけが、その笑顔を普通に見ていた。

5

◆◇◆◇◆◇

そして放課後。授業は、彰は要点のみノートに書き、自分流のアレンジを加えながら受けていた。一方のななかは、何がなんだか分からない、という感じで授業を聞いていた。

「さて、帰って練習しよっか」
「そうだね。早く上手くなりたいなぁ……」
「その前に……。音楽室に来てくれないかな、彰くん？」

ギターを担いで立ち上がった時に、小恋が彰とななかを訪ねてきた。

「なんで？」
「私ね、バンドやってるの。ベースなんだけど。あ、ドラムは渉君で、ギターはいたんだけどやめちゃって……。代わりに義之が入ったの」
「へえ。それで、見に来てほしいって？」
「うん。それで、どんなレベルか見極めてほしくて」
「レベルなんて関係ないよ。楽しめりゃいいんだから。でも、面白そうだから行こうっと」
「私も行く！」

アンプとエフェクターも忘れず持ち、ななかと共に音楽室に行く。一緒にいないと迷ってしまいそうで、一人で歩くことが不安になりそうだ。

「おっ、成澤師匠！」
「わざわざありがとな！」
音楽室には、既に渉と義之が準備していた。彰はドラムがシングルバスなのを見て、少し残念がった。
「そんで、曲やるの？」
「ああ、ＬＥＤ　ＺＥＰＰＥＬＩＮのＷｈｏｌｅ　ｌｏｔｔａ　ｌｏｖｅを」
「なら、ツーバス踏まないと」
笑いながら言う。シングルバスでは流石に手数不足だ。
ＬＥＤ　ＺＥＰＰＥＬＩＮのドラマー、ジョン・ボーナムは、ツーバスがうるさくてメンバーに隠されてしまったくらいだ。
「いや、金ないから踏めないんだよ」
「学校に頼んでみれば？買ってくれるかもよ」
「いいのかなぁ……」
「こういう時こそ頼んなきゃ。まあいいや、とりあえずやってみて」
そこらの椅子に腰掛け、義之達を見た。ボーカルはいない。それもどこか寂しかった。
いきなりギターソロから始めた。彰は注意深く彼等の演奏を聞く。
ドラムの安定さ、ギターのミスやノイズ、ベースのリズム。それらをちゃんと聞き取れるのは、やはりプロだからか。
「っと。ストップストップ」
「？」

彰が演奏を止めた。そして、立ち上がり、渉に近寄った。
「走ってるね。あと、もうちょい強く打ってみな？」
「マジか……。流石。大体、どれくらい強く打てば良い？」
「ちょっとスティック貸して」　スティックを受け取ると、渉よりかなり強くドラムを叩いた。
「こんくらい。逆に弱表現は」
渉のノーマルなドラミングより少し弱いくらいの力で叩く。やはり、プロだからか、明らかに音が違う。
「バスももっと踏もう。シングルなら、それを手数で補わなきゃ」
「な、なるほど」
「んで小恋ちゃん。もっと強く弾こう。フィンガーピックあげたよね？」
彰が小恋に近付く。小恋は今朝もらった本鼈甲のフィンガーピックを出すと、人差し指と中指に付けて弾いた。
「なにこれ！？こんな簡単に強く出来るんだ！」
「ベースは目立たない分、はっきりと聴こえるぐらい強い音を出さなきゃ。ちょっと貸して」
小恋のベースを借りる。ジャズベースシェイプのボディだ。
フィンガーピックを、彰は更に薬指も着けて、三本指で弾いた。人差し指でも、かなりの音量が出た。それを三本指で速弾きする。
「え！？えええええっ！？」
「成澤師匠、自重自重！！」
「ね？フィンガーピックって凄いでしょ」

完全にビリー・シーンのコピー奏法だ。フィンガーピックを外すと、本鼈甲のホームベースピックを出し、義之へ近寄る。

「義之くん。ピッキング強化しよう。斜めに当ててたよね？カッティングでも無いのに、ピックを斜めに当てたら、無駄なスクラッチノイズが出て、クオリティが酷くなる」

「それは、日々やらないと身につかない範囲だよな」

「スウィープ出来る？」

彰の言われた通りにしようとする。スウィープは三本以上の弦を、余韻を残しながら一気に弾き抜くテクニックだ。運指をいかに滑らかに、そしてピッキングをいかに丁寧に出来るかが問題だ。

因みにこの場合のピッキングはエコノミーピッキングという。複数の弦を、ダウンまたはアップピッキングのワンストロークのみで弾くテクだ。スウィープでなく、コードを弾き抜く時も、エコノミーピッキングを使う。

「やっぱりね。スウィープだろうがなんだろうが、基本は、ピックは垂直に当てて弾くこと。エレキギターの音の出る原理は、弦がピックに弾かれ、その振動をピックアップが拾い、シールドを伝わってアンプに出力される」

いきなり音楽理論に突入するが、そこまで難しい事は話していない。

「弦が弾かれるとき、嫌でもスクラッチノイズは生じるんだ。ピックは弦を弾くとき、滑ってしまうからね。だから、ピックの角度を垂直にすれば、ノイズは最小限になって、より綺麗で粒立ちがいい音になる」

「なるほど。因みに、ノイズサプレッサーは？」

「外部的ノイズを処理して更なるクリーンさを追求したいなら入れてもいいかな。コンプレッサーも一緒に入れれば更によし。でも、

使わなくても、外部的ノイズはシールドとかでどうにもなるよ」

義之のギターを借り、一弦の3フレットを抑えて弾いた。ピックは確かに垂直。オルタネイトピッキングをしても、エコノミーで弾いても、常に垂直だ。そのため、ノイズが極限まで削減され、音の粒が綺麗に揃う。

「ね、綺麗でしょ？」

「ノイズが彼方に……。流石すぎる……」

義之が涙を流しながら言う。憧れの人のギターを生で見れたのだ、感動せずにはいられない。

「ちょ、大袈裟だって」

「いやぁ、いいもん見れたなぁ……」

「そう言われて、悪い気はしないけど……」

「ね、彰くん。本来の目的忘れてない？」

「忘れてないよ。ギターを見るのも勉強になるしね。じゃ、そろそろ帰って、実際に弾いてみよっか」

「と、いうわけでバイバイ！！」

ななかが真っ先に教室から出る。彰は苦笑しながら、彼女に着いて行った。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　３　初レッスン

◆◇◆◇◆◇

「よぉし、ななか。ギター持ってきて」

家に着き、彰が玄関に入る前にななかに言う。昨日貰った”ヴィンテージ”物のストラトと、マーシャルのＨａｚｅ１５というフルチューブヘッドを持ち、彰の部屋に入った。もちろん、昨日貰った”マーシャル”ガバナー”も忘れていない。

彰は上だけＴシャツに着替えていて、動き易そうな格好になっていた。

「じゃ、アンプとギターを繋ごうか。ディストーションも忘れずに」

彰にシールドケーブルを2本渡されると、ジャックにケーブルを挿し、ついでにエフェクターにはアダプターも着けて、いつでも音が出る状態にした。

「これでいいの？」

「うん。じゃ、まずはチューニングから合わせようか。チューナーもあるけど、耳で覚えよう」

彰は立ち上がり、壁のギターを1本取り、マーシャルのＣＬＡＳＳ５に繋いだ。

ギターはＧｉｂｓｏｎ　レスポールカスタム。６０年製の黒い色で、レスポールにしては３．７Ｋｇと軽量な個体である。

「こんなふうに、チューニングが狂ってると、基本は音が合わないよね？どんなに頑張ってもチューニングをしなければ音は作れない。

だからチューニングをするんだ」
「なるほど〜」
「あと、ギターの説明をしよう」

レスポールのテール部分を膝に起き、ネックを支えて、ボディを見せた。

「弦は細い方が下、太い方が上になる。この一番下の弦が1弦。上に行くと2弦、3弦、って大きくなっていって、最後の一番上が6弦」
試しにななかは6弦を弾いてみた。低音で、ゴリッとした音がなる。

音程は確かにどこかおかしい。ななかはヘッドにあるツマミを弄ろうとした。

「そう、チューニングをするときは、そのツマミを回すんだ。ペグって言うんだけど、奥に回すと弦が張られ、手前に回すと緩むんだ」
低い感じの音なので、奥に回す。意外とくるくる回ることに、ななかはイメージと違うと呟いた。

「よし、音合わせだ。まず、1弦がE、ミの音」

彰がクリーントーンで1弦を弾いた。耳で合わせようと、ななかは音を聞きながらペグを回した。

「2弦がB、シ。3弦G、ソ。4弦D、レ。5弦A、ラ。そして6弦E、またミ」

次々に各弦の音を言う。ちゃんとクリーントーンで音を鳴らしながら。

６弦のチューニングが完了すると、ななかは彰を見る。

「次は何？」

「ピッキングを練習しようか。さっき言ったように、ピックは垂直に当てて弾き抜く。ノイズは歪ませて見れば判るんだけど」

試しに、彰はマイケル・アンジェロモデルのオーバードライブを入れ、斜めにピッキングしてみる。

音は鳴るが、鳴るまえにきゅっという音も入った。これがノイズだ。

次は垂直にピッキング。ノイズが極端に無くなり、音の粒が綺麗に解る。

「今のが理想。ピッキングにもいろいろ種類があって、上から下に弾くのがダウンピッキング。その逆がアップピッキング。交互にやるのがオルタネイトピッキング」

「なぁんだ、簡単じゃん」

「簡単じゃないんだなぁ、これが。押弦が入ってくると、必ずどっちか偏ってきたり、弦を間違えたりするんだよね。基本はオルタネイト、そして弦ミスりや空振りはしないように、ピッキングの練習」

小さいことから、こつこつと大事に練習していくのが彰流。細かいところまで丁寧に練習すれば、テクニックは思う以上に上達するのだ。

「まずは１弦から、アップ、ダウン、オルタネイトを３０回ずつ。

それから2弦、3弦とどんどん上の方に行こう」

言われた通りに始めるななか。彰はレスポールからシールドを抜き、別のギターに持ち替え、彼女の練習を見た。

2

◆◇◆◇◆◇

「終わったよぉ～」

ピックの持ち方も教えて貰い、彰の言ったピッキング練習を終えたななか。

ギブソン・SGスタンダードに持ち替えていた彰は、そのギターのボディを、牛革のクロスで磨き、美しいチェリーレッドの艶を出していた。

「うん。初めてにしてはノイズが少ない方だったよ。素質アリかもね」

「本当！？」

SGのノブを弄りながらななかに言った。

ハンマリングでピロピロと音を出し、音量を確認する。

「ドライブもよし……」

彰の真似をしようと、左手の指を指板に叩き付けるが、音が小さく、また、指も速く動かない。

アンプから出る音に気付いた彰は、必死にハンマリングを試みるななかを見て、ぷっと吹き出した。

「なによぉ……」

「いや、やるなぁ、と思って。まだハンマリング・オンは早いよ」

「へえ……。ハンマリング・オンって言うんだ」

ピッキングをせずに音が出るため、ちょっと違ったアクセントが得られるが、素早く音を出すために彰は使っている。スキャロップ

でなくても、音はピッキングした時と同じくらい大きい。
スキャロップとは、指板を抉って弦のタッチを軽くする、という意図でリッチー・ブラックモアがやり始めたものである。彼は深さのピークがブリッジ寄りに来ており、また6弦側に向かうに連れて凹みが浅くなっていく。
彼をリスペクトしているイングヴェイ・マルムスティーンもまた、スキャロップ指板のギターを使っている。しかし、彼は中心が一番深く、また、全体的に同じ深さの抉り方である。

「次は、指の強化。2弦12フレットに人差し指を置いて」

フレットを数えて、目的地に人差し指を置いた。彰はそれを見てアドバイスする。

「ゴメン、ポジションマークについて教えてなかったね」
「ポジションマーク？あ、この白いの？」
「うん。これはね、奇数フレットと、12フレットに着いてるんだ。後は、24フレットあるモデルは24に」
「なるほど」

続いて、フレットの抑え方についても説明した。

「指は出来るだけブリッジ寄りに置く。力はちょっと入れればいい。あ、ブリッジは、お尻から弦を出してるところね」
「なんで？」
「音がビビるっていって、響きが悪くなるんだ」

解りやすく、短い答。試しに中心を押さえ、弾いてみると、確かに、何かおかしい。

「ね？フレットの押さえ方も大切なんだよ」
「細かいことが大切なんだね」
「そうなんだよ」

言いながら、彰もＳＧの指板に指を置いた。
「それで、この運指の練習法は、３弦の１３フレットに中指、４弦１４フレットに薬指、５弦１５フレットに小指、って風にやるんだ」

試しに彰がやって見せた。滑らかな指の動きに、ゆっくりと出る音。先程のピッキングの要点も忘れていない。

「これをオルタネイトでやる。終わったら、１弦ずつ上にずらして、その次にまた戻り、最後に１弦下にずらす」
「わかった」

彰はデジタルメトロノームを引っ張り出して、ななかの前に置く。随分ゆっくりしたテンポで動かしはじめた。

「リズム練習も兼ねてね」
「うん」

ピックを動かし始める。テンポに合わせながら、指板をよく見、ピッキングする。

しかし、１５フレットで弦を空振りしてしまい、失敗した。

「むぅっ？」
「惜しい、手元もしっかりね」

最初からやり直し。今度はピックを見ながらだ。縦方向の移動し

かしていないのだから、指板はあまり見なくても大丈夫だろう、とななかは思った。

ななかの考えは正しかったようで、弦飛びもなく、スムーズに弦が弾かれていく。

「そうそう。判ってきたんじゃない？」

ＳＧを片付けると、今度はエクスプローラを取り、丁寧に磨きながらななかを見た。ネックの反りなども確認し、試し弾きをして。

「うーん、いい音出すなぁ、やっぱり」

エクスプローラの響きに満足し、ななかの練習のスムーズさに感心し、今日は結構いい日では？と彰は思った。

「3

エクスプローラを拭き終わり、片付けると、彰は立ち上がり、スタックの影に隠れている、大きなギターケースを計3つ持ってきた。

ちょうどななかが終わる頃、彰は一つ目のギターケースを開けた。

左右対象に伸びる二本のネック。ストリング・ダンパーが着いており、また、シールドジャックとフロイドローズライセンストレモロが二つ、ピックアップはシェクター・スーパーロックＩＩＩが二つずつ付いていた。

ななかは、彰に終わったことを告げようとするため、彰に顔を向けた途端、彼女の口が半開きになった。

「え、なにそれ？」

「特注のダブルギター。ピアノからヒントを得たんだよ」

クロスで吹き上げ、ハンマリングで鳴らしながら、ななかに見せる。

「これは分離できる。ま、いっぱいあるんだけど、これは」

こっちはちょっと少ないよ、と言いながら、２つ目のケースを開ける。

「大道芸……」

さっきのダブルギターの下に、同じシェイプのギターがまた二つ

着いている。下のギターにもフロイドローズ型のトレモロシステムが着いており、ペグが7つあるが、果して意味はあるのか。

「クワッドギター。これは6本しか持ってない」
「6本”も”じゃない？」
「これを更に発展させたのが――」

最後の、特大のケースを開けた。クワッドギターに、更に真ん中から左右に二本のネック。しかも、12弦ギターであり、これもまたフロイドローズトレモロが付いていた。

計6つのシールドジャック。裏から挿す形だが、アンプも6つ必要だ。

「それはもう、ギターじゃないよね」
「シックスギターだよ。世界にこれしかない、僕専用ギター」

スケールの大きさ、発想センス、そしてボディシェイプ。どれを取ってもド迫力。

「勿論ベースもあるよ」
「作る意味が……」
「視覚的にも楽しんで貰わないとね」

片腕でシックスギターを頭上に持ち上げた。かなりの重量の筈だ、それを片腕で持ち上げる彰もどうかしている。

「彰くん、もう人間を超えてるよ」
「私の星では、赤ちゃんでも出来る、ってね」
「宇宙人！？」

冗談を言う彰。しかし、そう信じてしまうななかがいた。信じてしまうのも仕方ないだろう。目の前のもの全てが普通じゃないのだから。

次第に、自分が言ったことに、ななかが吹き出しそうになり、結局、吹いて笑い出した。

「宇宙人じゃないもんねぇ」

「うん。人より面白いを考えるのが得意なだけだよ」

びっくり人間ショー的な何かにも出れる。いや、優勝さえ出来る。ななかがふと口に出すと、彰もそう思いながら、少し笑った。

「実際に弾いてみようか？」

「うん！」

かなりの幅広のストラップをつけ、６本のシールドを挿し、特注のシールド中継機に挿して、ＴＰ－１０１１からＭａｒｓｈａｌｌ Ｍａｊｏｒ １９６７へと繋いだ。

彼のＭａｊｏｒ １９６７は、ＶＯＸ ＡＣ３０のトレブルブースト機能を”自分で”組み込み、マスターボリュームを付けた改造アンプだ。パワー管のＫＴ８８から生まれる２００Ｗの出力により、爆音がなり、エフェクターでドライブさせれば、最高のサウンドが作り出せる。

それを、４００Ｗ近い出力をもつキャビネット「１９６０」で３段積みのスタックを構成しているのだ。鼓膜が破れるくらいでは済まないだろう。

「アッテネータで絞って……」

パワーをかなり落とす。そして、ハンマリングで、左右の弦を鳴らし始めた。

「凄いなぁ……」

両利きの彰にとって、両手でギターを弾くことは朝飯前だ。しかも、握力がとんでもなく強いため、コードをハンマリングで弾いたりも出来る。

対角線にギターを弾いたり、１２弦と組み合わせたりなどもした。片手で弾きながら、彰は冷蔵庫の前まで動き、５００ｍｌペットボトルのファンタグレープを二本取り、ななかに一本渡した。

もう一本は器用に片手で開け、キャップを親指で抑えながら飲みはじめた。

余裕そうに速弾きを見せながら、ファンタを飲む異様な光景。此処こそびっくり人間ショーの会場だ。

「わぁぁっ！！」

口にくわえ、７弦のネックを持ち、下から上げ、頭上へと動かす。

これが大技「アンジェロマウンテン」である。

ファンタを一気に飲みながら、これを行う彰。

本当に人なのか、再び疑うななかがそこにいた。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　&ｑｕｏｔ；Ｂｒｅａｋ&ｑｕｏｔ；　ギター漫談その１

シックスギターを置いて、ハードケースにしまうと、飲み干したペットボトルを、ドア付近のごみ箱に投げ捨てた。

「ないっしゅー」

「いやいや」

壁にギターケースを建てかけると、また別のストラトを持ってななかの前に戻った。

少し黄ばんだ白色に、ヘッドに突き出たブレッド・トラスロッド。ブラスナットの四点止めネックに、メイプルスキャロップネック。

Ｆｅｎｄｅｒ　ＵＳＡのイングヴェイ・マルムスティーンモデルのストラトだ。ジャンボフレットに、ディマジオのＨＳ－３をフロントとリアに乗せてある。

「ねえ、彰くんって、何本位ギター持ってるの？」

「数えたことはないけど、多分、Ｆｅｎｄｅｒのストラトは３００本はあるんじゃないかな？」

「ひぇぇぇ……」

イングヴェイ・マルムスティーンも、２００本のストラトコレクションがあるという。かなりのマニアでも、ここまでは集めない。

「ＤＥＡＮが３０本、Ｉｂａｎｅｚが１５本、Ｇｉｂｓｏｎが２０本、プレテクが４本だったはず。Ａｒｉａ　Ｐｒｏ　ＩＩも気に入ってて、ＸＸ－ＤＬＸっていう、あの変形ギターを良く使うんだ」

壁の白いギターを指した。ハムバッカーのエスカッションに、無理矢理シングルコイル・ピックアップを積んだ物だ。指板はメイプルで、スキャロップはしていない。

「でも、ギブソンに特注で、シングル3発のVを作ってもらったよ」

「あれの隣がそれ？」

「そう」

ちょうどアリアの隣にある、赤色のフライングVをななかが見つけた。赤と言っても、木目を出した美しいシースルーレッドだ。

XX－DLXとは違い、フロイドローズに、ロックナットと、シャーラーのマグナムロックを付けており、抜群のチューニング性能を誇るギターだ。また、これも、アリアも、片側六連のペグだ。

「このストラトはアーティストモデルで、弾き易くて結構好きなんだ。音も面白いし」

「どんな音？」

「通常、シングルコイルってのは、少しパワーが無くて、ノイズが多い。このギターのピックアップは、パワーが合って、しかもノイズも少なく、シングルコイルの特徴の高域も出してくれるんだ」

「へえ……。なんか、良くわかんないけど」

「聞いてみたら解るよ。後、これは指板がくぼんでるでしょ？」

ギターを渡し、指板を指す。全体的にU字状に深くえぐってあるのが、ななかにもわかった。

「なんで？速弾きと関係あるの？」

「ビンゴ。これはスキャロップネックって言って、

押さえる、っていうより、触れる事で、音を出せるんだ。後は、細かいチョーキングやビブラートもやり易い。ただ、唯一の悩みが、ネックが反りやすいところかな」
「ビブラートって、音が震えるあれ？」
「そうそう」
「あと、ネックの反りって？」

彰は、ギターのジャンクネックを、段ボールの中から取り出し、説明した。

「なんでネックだけ……」
「自作用にね。ネックってのは、弦の張力で、真っすぐになってるんだ」
「あ、大体解った。バランスが悪いと、反っちゃうんだ」
「そう。弦のテンションによって変わって来るし、湿気でも変わっちゃう」

木は、かなりデリケートな「生き物」だ。その木によって、音も、弾き易さも変わって来る。

「木製以外のギターもあるけど、木の音は木の音でいいんだよ。木の材質が違うと、鳴りも違うし」
「へえ。じゃあさ、軽くて、響く木って、どれ？」
「まさにそれだよ。ななかのストラトはアッシュっていう木で出来てる。ライトアッシュは軽いし、サスティンも良い」

アッシュにも色々ある。ホワイトアッシュやライトアッシュ。また、ストラトは主にアルダーかアッシュで作られている。

「ネックの反りは、トラスロッドで調整できるけど、なるべく僕の

ところに持って来て。音がおかしかったら、反りを疑っていいからね」
「わかった。でも、ギタリスト以上の仕事してるよね？」
恐るべき知識量。流石と言うべきか、何と言えば良いのか。「まあ、色々勉強したからね。音に常に貪欲であることと、楽しむことの為に、こういうのを学んだんだ。相当役に立つ知識だよ」　趣味のための知識なら、覚えるのは苦ではない。彰の心境はそんな感じだろう。
「そういや、ギター以外にも、色んな楽器が来るはずなんだけど……」
言ったと同時、タイミングよくインターホンが鳴る。彰は部屋のドアの横の受話器を取る。カメラが映し出すその姿は、まさしく運送業の人間であった。
「お荷物をお届けに伺いました」
「は～い。ちょうど来たね。ななか、手伝ってくれない？」
「いいよ！」
階段を上がり、玄関を開ける。バスドラムやハモンドオルガン、ベース、残りのアンプ、キャビネットが届いたのだ。
運送業者数人で、下の彰の部屋まで持っていく。全部の機材が積み込まれると、彰は包装を剥がし、ドラムを組み立て始めた。
「ななか、そっちをその上に乗せて」
「うん」

ツーバスの巨大なドラム。シンバルやハイハット、タムタムが数多くある。

次にハモンドオルガンとシンセサイザー。スタンドを組み立て、シンセを乗せ、ハモンドの上にまた鍵盤とコントローラーを置いた。

ベースのスタックも組み立てる。ななかと一緒にスラントタイプを持ち上げ、ヘッドにＭａｒｓｈａｌｌ　ＪＣＭ８００　２００１ＢＡＳＳを乗せる。３７５Ｗの出力を誇るベースアンプに、３００Ｗの１９６０を２段重ね。鬼の９７５Ｗをたたき出す。

しかし、中にはマーシャルだけでなく、エングルやゲンツ・ベンツ、ヴォックス、フェンダー、ヒューズケトナーなどもちらほらと見えた。

「うわぁ、いっぱいだぁ。良くこんなにお金あるね」

「貰い物とか格安商品とかしかないよ。もちろん新品もいっぱいあるけどさ。例えば」

適当に転がっていたマーシャルのＶｉｎｔａｇｅ　Ｍｏｄｅｒｎ２４６６を持ち上げ、見せる。

「これなんか、ピッカピカの新品だよ。真空管も生きてるし」

「それは貰い物？」

「うん、モニタープレイで3台貰ったから、1台あげるよ？」

「じゃあ貰う♪」

片手で受け取ろうとするが、彰は両手で持つことを勧めた。

真空管アンプは３０ｋｇ近くある。片手よりも両手の方が持ちやすく、安全だろう。

「オルガンは……。まあ、ばあちゃんから貰ったんだけどさ。色々と改造して、３００ｋｇは超えちゃってるはず」
「ほええ……」

オルガンの前へ移動し、電源を入れて、鍵盤を押す。
少し歪みが入った音が鳴る。指を更に動かし、ベートーベンの「月光」を弾いてみせる。

「クラシックだ……」
「ここから！」

クラシックである月光から、ジャンルを変えて、Ｓｔｉａｒｗａｙ Ｔｏ Ｈｅａｖｅｎを弾き始めた。

「ブルース調に……、からの……」

ハードロックへと変え、Ｒａｉｎｂｏｗの疾走ナンバー「Ｆｉｒｅ Ｄａｎｃｅ」のソロを奏でた。

ギターの時と同じ位、速く動く指。芸術的とも思えるくらい美しい指使いは、ななかを一瞬にして魅了させた。

「こんなもん。……ななか？」
「ずるいよずるいよ！そんなに出来るなんて！」

笑いながら、彰に言う。小恋が憧れている理由がわかった。
レベルの高いマルチプレイヤーであることが、憧れになるのであろう。

「凄すぎるよ。流石、プロ」
「ありがとう。好きだからね、音楽」
好きだけでここまでやれるのも魅力の一つだろう。
義之が涙を流したのも、師匠と呼ぶのも、解る。
それを、直で、しかも一対一で見れる自分はラッキー、そうななかは思った。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　４　ジャム

翌日。昨日と同じ様に、小恋とななかと一緒に学園に行こうとする時、小恋が彰に聞いた。

「ねえ、今日の放課後、ジャムらない？」
「どこでやるの？」
「音楽室だけど……」

あそこはスタックも組んでいないし、小さいコンボアンプしかない。また、渉のドラムもシングルバスしかないから、迫力に欠ける。

「ウチに来なよ。ウチなら、いくら音出しても大丈夫だからさ」

◆◇◆◇◆◇

放課後、玄関へななかと一緒に向かい、靴に履き変えて校門へ行く。　義之達がすでに待っていたのだ。ついでに、義之の幼なじみである由夢も一緒だ。

「よろしくお願いします、彰先輩」
「よろしく」
サインを貰って彰の家へと移動する。因みに、由夢の制服の背中にサインが書かれた。

「彰先輩、サインありがとうございます！！」
「いいよ、気にしないで」

玄関を開けながら言う。祖父の信太が彰達を出迎えてくれた。

齢８０にして、未だ現役の料理人。背筋は今も真っ直ぐである。
「お帰り、彰くん。お友達もいらっしゃい」
「ひいじいちゃん、今日は休み？」
「まあね。後で料理でも持っていってあげるから、ゆっくりしていきなさい」
「出来たら呼んでね。僕も運ぶの手伝うから」
「ありがとう」

自室に行く前に言った。祖父想いの優しい少年、そう彼等には映った。

地下へと続く階段を下り、部屋のドアを開ける。スタジオが目の前に広がり、義之達を唖然とさせた。

３００本以上のギター。巨大なスタック。そして、要塞と化したドラムとキーボード。ヴォーカル用マイクなどもセッティングしてある。
ななかも自分のストラトを持ってきており、昨日の２４６６を、開いてある１９６０に繋いで、エフェクターをセットした。

「こ、これ使っていいのか！？」
「いいよ。ほとんどマーシャルだけど、ヒュース＆ａｍｐ；ケトナーとか、ゲンツ・ベンツとか、メサブギーとか色々あるから、そっち使ってもいいし。エフェクターもいっぱいあるよ」
昨日のシックスギターをセッティングし、１９６７に繋ぎながら言った。

「それ弾くの！？」

「うん。小恋ちゃんも、自由に使っていいよ。リッケンとか、プレベとかあるし」
「おお、ツーバス……」
「思う存分踏んでいいよ」

シックスギターを両手で弾きながら言った。義之達は、音の数で圧倒されながらも、必死に楽器をセッティングする。

「彰くん、練習は？」
「昨日のヤツと、後は運指練習のパターンを追加しようか。左手でやるから見ててね」

右手で別のフレーズを弾きながらも、左手でゆっくりとハンマリングで音を出した。４弦の１２Ｆを小指で押弦し、そこから１弦の１０Ｆを中指、３弦の９Ｆを人差し指……と言う風にする。

「あと、押弦を交えたエコノミーピッキングだね」

１弦１０Ｆ、２弦１１Ｆ、３弦１３Ｆと、右手をピックに持ち変え、アップピッキングのみで弾き抜く。その次に、２弦１１Ｆ、１弦１０Ｆをダウンのみで弾き、その二つを合わせて繰り返す。
「結構運指の練習にも効くから、これを５回３セットずつ」
「ＯＫ」

教えると、再び両手でギターを構え、義之達を見る。

「曲なにやる？」
「Ｊｅｔ　Ｔｏ　Ｊｅｔ？」
「出来んの？」

聞きながら勝手にイントロを弾き始める彰。

「片手で……」

人外過ぎる。誰にも敵わないのではないか？と義之は思った。

渉はツーバスに夢中になり、ひたすらドコドコ踏んでいる。軽い力で強く打てるペダルを使っているため、連打がしやすい。

ＢＰＭを２７０に合わせても、変わらぬ安定感を見せつける彰。ギターブレイクで、両手で違うフレーズを奏でる。

そこからのソロは、アドリブを連発しながら、よりクラシカルに演出していく。６弦スウィープの精度を見せ、チョーキングでのキメフレーズへと流れるところもよりクラシカルだ。

「ビブラート、ハンパないな……」

美しさを表現する為に、ビブラートを意識しながらかける。揺れを細かく、速くすることによって、より繊細に奏でられる。技術力の高さが見受けられるものの一つだろう。

「次は？」

「ごめん……。まったく着いていけなかった……」

「ははっ」

軽く笑い、シックスギターの音を絞る。アンプのボリュームも０にし、ギターからシールドを抜くと、今度はまた、別のストラトに持ち替えた。

Ｆｅｎｄｅｒ・６７年製のサンバーストカラー。ピックアップは

DiMarzio　DP111に変えてある。

「安いピックアップだけど、かなりパワーがある音だから、ガンガンやらないと呑んじゃうからね」

2

６７年製「暴れ馬」のストラトを持つ彰。本鼈甲ピックを持ち、弦を弾きながら、半音下げでチューニングした。

とても心地好い生鳴り。最高峰のアッシュにラッカーフィニッシュだからだろう。木の性格を表している。

「さあ、いこう」

Ｍａｊｏｒの音量を思い切り上げ、ＴＰ－１０１１のエコーを少し効かせる。

美しい音色を奏でるギター。眼を瞑り、音を感じながら、ハンマリングでレガートにキメていく。

ギターのボリュームを弄りながら、ギターサウンドを故意に変化させるバイオリン奏法。途中でピッキングを入れながらも、指でボリュームを弄り、アタック音を聞こえなくさせながら、リズミカルに弾いていく。

「綺麗……」

パガニーニの様な、中世のバイオリンを思わせる。彰の後ろに、ルネサンス時代のイタリアが見えた様な気がした。

皆がその気になっていると、急に彰はギタープレイを変え始めた。

乱暴なアーミング。我を忘れて、暴れ回るドライブサウンド。弦を走り回る左手とピック。

「ネオクラなら、任せなさい」

クラシカルでありつつ、メタルサウンド。彰のテクニックが活きるジャンルだ。

メタルの音でありながら、クラシカルかつメロディアスに弾くこと。それが、ネオクラシカルメタルの特徴だろう。

リッチー・ブラックモアがクラシックを取り入れ、ウリ・ジョン・ロートがそれを完成させ、ランディ・ローズ、イングヴェイらが発展させた、メタルのジャンル。

速く弾くことも、クラシカルに表現する技術の一つだ。

彰はそれを得意とし、師である自らの祖父・亜紀人よりも速く弾けるのだ。

教わって3週間で、亜紀人より速いピッキングが出来、更に3ヶ月で、スウィープやビブラート等のテクニックが超絶的になった。

「速弾きしながらのビブラートって……、マジかよっ……！？」

指板上で、手はビブラートを細かく、素早くかけながら、縦横無尽に駆け回る。勿論、右手も同時にだ。

「さあ……、これが、本職の本気……」

ピッキングノイズを更に少なくしながら、ボリュームを弄り、速弾きする。足元のボリュームペダルでも調整しながら、高度なバイオリン奏法をしてみせた。

「本当に、クラシックを聞いているみたい……」

「でも、ガンガンなメタルだよっ！」

ななかが影で練習しながら言う。スムーズなエコノミーピッキングが身についた様で、小恋を見ながらでも出来る。成長速度はかなり速い。

彰の教え方か、ななかの素質か、どちらだろう、と小恋は思った。

「ふぅー」

締めのビブラートをかけながら、ななかに次の練習を提示する。

「2弦の4と5に薬指と小指を置いて。それを動かさず、人差し指と中指で、2から3を、1弦から3弦まで押弦する」

「人差し指、薬指、とかもやるの？」

「うん。これは指の独立練習だから、最初はゆっくりでね。勿論、ピッキングとリズムマシンは忘れずに。5往復ずつを2セット」

なかなか考えられた練習だ。因みに、これはクロマチック練習といって、その名の通り、半音ずつの音を出す練習である。

2日目のななかのギターの腕前は、昨日よりも格段に上手くなっていた。

「3

ななかのクロマチック練習を見ながら、彰もスケール練習を開始する。Cリディアン。彰は何にでもドミナントコードを多用する。また、使える物ならばなんでも使う。大移動スウィープや、逆手アルペジオ、タルカスなど、様々だ。

「次は？」

「すげぇ、逆手でミクソリディアンかよ……」

どちらの手でも、どのようにしても、同じ弾き方が出来る。両利きであるから、この様な弾き方が出来るのだ。

「『Ｓｐｏｔｌｉｇｈｔ　Ｋｉｄ』とか、そこら辺が義之くん達に向いてるんじゃないかな？後は、『Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｒｏｃｋ　Ｃｉｔｙ』」

ＫＩＳＳの有名ナンバー『Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｒｏｃｋ　Ｃｉｔｙ』のリフを弾き始めた。よくあるパワーコード。しかし、これが耳に残りやすい。

「シンプルだけど、なかなか影響のある曲でしょ？」

「簡単そうでもあるし、中々ウケそうだね」

小恋が試しにベースラインを弾いてみる。彰のＲｉｃｋｅｎｂａｃｋｅｒ　４００３を借りて。

「そうそう、歪みも軽い感じで。後、これはハムバッカーの方が良いかもね」

ストラトから、ＭＡＢモデルへと持ち替える。ＨＳＨレイアウトで、音作りが多彩に出来る。

「ちょっとトーンを落として、リアで弾けば」

鋭角的な、突き刺さるリフ。義之と渉の中で、何かが湧いた。

「後は、『Ｃｒａｚｙ Ｔｒａｉｎ』。これも特徴的だね」

殆どコードだけで出来る、Ｏｚｚｙ Ｏｓｂｏｒｎｅの名曲。ランディ・ローズを意識して、彰はアルピーヌ・ホワイトのレスポールカスタムに持ち替えた。

コードから始まり、独特なスイッチング奏法。それに義之が着き、小恋と渉がリズムを作る。

一緒にリフを弾き、コードのバース。しかし、ここからは彰の独壇場であった。

ソロでも無いのに、アドリブを決めまくる。速弾き中心に、義之達を全速力で置いてきぼりにしてしまった。

忠実にコピーする義之は、彰の真似をしようとしても、ミスりたくないため、やめた。ソロまで、この調子で行こうと決めた。

肝心のソロ。ここはタッピング、プリング、ハンマリングを駆使して弾くソロだ。義之が指板に右手を置き、タッピングを開始する。

しかし、彰はフルピッキング。　ノイズなしで、しかも音数を多

くして。

「先生、そこフルピッキングで弾くとこじゃないです」

「ピッキングで感じるのさ」

まさかのソロ延長。ペンタトニック中心にアレンジを極めていく。

「やべぇ、暴走してる……」

ランディ・ローズも泣く程のアレンジ。曲調を崩さず、尚も速く。

「ひゃあああ！！」

最早自己満足。ワンマンショーになっている。

腕が有りすぎるのもどうか、と、考える義之。

ただ、曲自体は壊していないので、聞きたくはなる。

珍しくラッシュを入れず、落ち着いたプレイ。

テクをまざまざと見せ付けながら、ななかに学習させようと彰は試みた。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　５　魔法の手癖

◆◇◆◇◆◇

「なんで、そんなに手癖が作れるんだ？」

色々な曲をやったあと、義之が彰に聞いた。

プロの話。実演を見た後で、それを聞けば、いい勉強になるだろう。

「ハーモニックやペンタ、ドミナントを二年くらい勉強したんだけど、弾いているうちに指板とか覚えちゃったんだよね」

「指板を！？」

「例えば、ドリアン。Ｃでいくと」

２弦の１Ｆがトニックになる。そこから３弦５Ｆまでゆっくりと転回させた。

「これとＣのフリジアンとか似てるよね？こことここが違うから、これはドリアンだー、とかこれはフリジアンだー、とか覚えちゃう。後は、こういうのをうろ覚えでね」

スケールブックを、近くの棚から取り出す。メモやらなにやらが沢山挟まっていた。

「これを見て、作曲とかもやるし、『練習方本』とかもこれで作ったんだよ」

この歳で、教則本も出している。ＤＶＤやらも何本か作成しており、それでギタリストの養成もしている。

「あ、本屋さんに教則あるよね」

小恋がそれを思い出した。ベーシストの為の教則もあるらしく、彼女はそれを読んで覚えたと言う。

「あれって、スラップとタッピングくらいしかやってなかったような」

「いやいや、ピック弾きと指弾きに分けて、必殺テクとかいっぱいあったよ！」

「ピック弾きの必殺？……ああ、ピックで弦を叩く、パシピックね」

ギターをアンプに立てかけ、近くのＢ．Ｃ．Ｒｉｃｈのベースを持つ。

ホームベースピックの側面を叩き付け、ぶつかった音を効果音にして出す。それを連続して、マシンガンの様にした。

「そうそう、それ！！」

「これ、祖父ちゃんのライブ中にやったんだよね」

彰が言いながら平たい面でも叩く。今度はバズーカを意識したようだ。

「後は、これだよね」

ベースでスウィープ。よくあるのだが、彰は逆手でスウィープしている。

「それは出来ないよ……」
「これは指弾きの方にも載せたような……」
ピックを咥え、人差し指と中指の側面でスウィープ。こちらの方が、指が滑って速い。
「手の付け根でもやれるよ」
ごとごとと音を出しながら行う。笑えるくらいにスムーズだ。
「凄……」
小恋が彰の手元をじっくり見ながら言った。知らない内に彰の目の前にまで近付いていた。
「近いよ」
「あ、ああっ！？ごめん！」
顔を赤くして、離れる小恋。渉が彰を睨んだ。
「うわぁ、視線が痛い……」
渉が小恋に惚れていることが、そこで理解できた。ななかは笑いながら彰に近付く。
「小恋のお気に入りになっちゃったねー、彰くん」
ななかの発言が渉に火を付けた。

「成澤師匠！！俺とドラミング勝負してくれ！！」
「へ？」
「一分間でどっちが多く叩けるか、勝負だ！！」
渉が小恋の前でカッコつけたいようだ。彰はそれを読み取ると、勝負を受け、ドラミングカウンターを設置し、スティックを出した。
「いきなり、何を……」
義之と小恋が困惑し始める。ななかが狙ったような感じになっていることも、彰は読み取った。
「先に渉くんから叩いていいよ」
余裕をかましながら、彰は言った。渉の眼が燃え始め、手が振られた。
これが彼の本気だ。ツーバスを踏みつつ、かなりの連打を見せる。
「なんだアイツ！あんなに出来たのか！」
「渉くん、凄いなぁ……」
小恋と義之が湧くが、彰とななかは余裕そうに見ている。特に彰は、「それがどうした」と言わんばかりだ。
「どうだ！」
一分間経過。渉の本気が結果に出、フロアタムが８０回、バスドラムが２６０回、タムタムが大小合わせて２０回、スネアが１２０回。合計、４８０回。

「へえ……。まだまだだね」
「んなぁにぃ！？」
彰が煽り、渉が眼を見開く。ドラムスローンに座ると、スティックをくるくる回しながら、彰は自信に塗れた顔をする。
「行くぞ、彰……。スタート！！」
義之の声と同時に、ツーバスが連打される。
スティックが、軟らかくしなる手首により、スネアを絶え間無く叩き続け、時々クラッシュとライドを乱暴に叩く。
バスは止まない。明らかに、渉より速い。
「せ、セコいなあいつ……」「ばっきゃろう！同じ条件だろう！！」
タムタムとスネアのコンビ。手首と足がロボットの様に動く。
「あと１０秒……」
更にテンポアップ。ビーターが見えない。カウンターは眼が回るスピードで数え続ける。
「はい終了ー」
止めに、後ろの銅鑼を、銅鑼用の枹で思い切り叩いた。
「回数は……。バスドラム６７０．．．．．．はぁ！？」

この時点で彰の勝利。だが、スネアも２００、タムタムは１８０、フロアで１４０、クラッシュ、ライド、ハイハットが７０ずつ、銅鑼が１の、計１４０１回。

化け物の領域である。渉が地に手を付け、圧倒的な力の差に平伏した。

2

◆◇◆◇◆◇

渉とのドラミング対決から、翌日。渉に逆に尊敬され、それを快く思った彰が、空きのスネアにサインを書いて渡すと、渉に抱き着かれ、キスされそうになった。

幸い、義之が止めに入ったおかげで、渉と義之の熱いベーゼが見られた。彰達は腹を抱えて笑った。

ここは彰のななかの教室。勿論、ギターを忘れていない。今日のギターはＥＳＰ　Ｃｒｙｉｎｇ　Ｓｔａｒ　Ｃｌａｓｓｉｃ。通称クラクラちゃん、Ｓｙｕシグネチャーモデルだ。

「えーっと、曲は大体決まりました？」

「うん。こんなセットリスト」

ガチガチのメタルリストを渡した。所謂ジャパメタと言われる曲が多い。

「お馴染みアン○ン○ンやら、ド○え○ん、水○黄○、嵐とかをメタルカバー。後はラウドネスを中心に」

「はあ……。Ｃｒａｚｙ　ＤｏｃｔｏｒとＳ．Ｄ．Ｉに、Ｓｏｌｄｉｅｒ　Ｏｆ　Ｆｏｒｔｕｎｅですか……」

代表曲の三拍子。彰がＣｒａｚｙ　Ｄｏｃｔｏｒのリフを弾き始めると、ななかが歌詞を見ずに歌った。

背中合わせになり、弾く彰と歌うななか。息ピッタリの二人が、シンクロを見せ付ける。

「鬼上手……」

仲良し二人組。しかし、ちゃんとユニットになっている。

「タッピングは～？」

「クリーンで弾けぃっ！！」

ブースターを切り、クリーントーンでタップする。高崎晃を忠実に再現している。

「僕がリードギターやるから、君らはリズムギターと、ドラムと、ベースと、ボードをやってね」

「勿論、教えてくれますよね」

「うん。体育館借りて、練習会を開こう」

大規模なギタークリニックだ。彰がクラクラちゃんを担いで弾きながら言った。

「因みに、ピアノとか出来る人？」

2、3人いた。彰はそれらを呼び出し、握手する。

「シンセとオルガンを使って、やってもらうからね。楽譜は……はい。後で練習しよっか」

「はい」

贅沢な練習。彰のレベルまで到達出来るか心配だが。

「軽食係は……。いたいた」

学級委員が軽食係を指す。

「調理室、取れた？」

「うん、余裕。サンドイッチとか、コーヒーとかの材料は、成澤くん家経由で」

「ひいじいちゃんのＯＫサインも出てるからね」

手癖ドリアン。指板を見ずにだ。

「トラックで機材も持って来たし、今から練習出来るけど、やる？」

トラックは創龍提供だ。流石便利屋、と彰は思った。

「やりたい！！」

満場一致。彰はクラクラちゃんをギグに入れ、１９５９を持って体育館に移動した。

◆◇◆◇◆◇

「ギターの子、ここはハンマリングで鳴らして」

彰の楽曲指導。ななかが、自らのＣＡＲストラトを弾きながら、それを見る。

「ななか、ハンマリングとプリングの練習」

「こうでしょ？」

見様見真似でやってみせた。この前よりも指の自由度が違う。上質な鳴りが体育館に響いた。

「これがお手本です」

ななかをクローズアップしながら言う。彰はベースを持ちながら、ギターやドラムを指導している。

「ベースは押さえてべべべやって。ノイズは指弾きだと気にならないから、指で弾いた方がいいよ。ドラム！！そう！パワフルヒット上手いね、君！！」

あちこち忙しい彰。ななかはビブラートの練習をしながら、彰を見る。

楽しそうなその姿。まるで、遊びのような感じ。

「白河さん？スケールアウトしてるよ」

「あちゃぁっ、やっちゃった」

ビブラート自体はミスってはいないが、スケールアウトは曲を壊す。彰はななかに近付き、指導した。

「ベンディングのビブラートでミスった？」

「そこらへんかな」

「ベンドをちょい低くしてみなよ」

言われた通りにやってみる。自然な感じの音が鳴った。

「どう？」
「良い感じ！！」
笑い合いながら話す。彰はベースでもベンディングビブラートをしながら、ななかと合わせた。
「これも慣れなんだけどね。一日二日じゃ、なかなか出来ないんだよ？」
「じゃあ、私って凄いの？」
「かなり」
ベースで暴走しながら言う彰。ビブラートは、長い年月を掛けて、完成形に持って行く技術だ。それをこなしてしまうななかが末恐ろしい、と彰は思った。
３フィンガーで、ベースラインの手本を見せる彰。ベース担当グループが、２フィンガーで落ち着いているところを見れば、彼等の必死さが解る。

「3

◆◇◆◇◆◇

練習は休み時間も行われた。疲れた者は休んでいるが、やる者は、彰に近付いて必死に練習に励んでいた。

クラクラちゃんのボリュームとトーンを弄りながら、音の明瞭さや、表現方法を説明している。

「バッキングはボリュームを少し下げて、アンプ側のベースコントロールを少し上げた方がいいよ。下から持ち上げる感じだね。ピックアップのボリュームは7とか8あたりかな？」

「ジャキジャキ感を出したいんだけど……」

「リアのピックアップは普通パワーがあって、『ザクザクッ！！』って音が出るんだ。だから、リアにして、トーンとミドルを上げてみれば良いんじゃない？後、ゲインを少し上げて見ても良いと思う」

皆には、彰がマーシャルから無料で提供された「ＪＶＭ４１０Ｈ」を貸し出している。４チャンネルのモードがあり、アンプのみで、幅広い音作りが可能だから、彰はこれを選んだ。

足りない分は、これまたマーシャルのパワーアンプ「ＥＬ３４１００／１００」に、シールド分配機を使ってダイレクトボックスに繋ぎ、体育館のスピーカーから音を出している。ダイレクトボックスの方には、プリアンプも付けているので、音は自在に作れる。

「彰くんの音作りって、どんなの？」

「ＭＡＪＯＲはボリュームは状況に応じるね。後はトレブルを7、

ミドルを4、ベースを2、プレゼンスとゲインは0」

更に、TP－1011の内蔵マイクでプリアンプ代わりに、そしてMajor自体にはハイパスフィルター等が積まれている。ブラックモアと同じセッティング・改造だ。

「後は、秘密」

勿体振る彰。隅々まで教えてしまったら、皆自分になってしまう。しかし、アンプの改造までやらないと、絶対に彰の音は作れない。

その改造も、難しいのだ。ハイパスフィルターの正確なフリーケンシーを取ることはほぼ不可能であるし、VOX　AC30の部品なども使われているからだ。ここまでも、ブラックモアの音と似ている。BSMという、ドイツの会社のブラックモアのブースターを使えば、その音に迫れるのだが、やはり、ブラックモアと同じセッティングでないと、音は作れない。

彰は、リッチー・ブラックモアの音が一番好きだ。奏法はマイケル・アンジェロ、イングヴェイ・マルムスティーン、クリス・インペリテリ、ポール・ギルバート、スティーブ・ヴァイ等を参考にした。しかし、音はリッチー・ブラックモアとマイケル・アンジェロの二つしか参考としていない。

イングヴェイとインペリテリは、ミドルが出た音、ヴァイとポールはドンシャリに少しのミドル。ウリ・ジョン・ロートは訳が判らない。

リッチーはトレブルブーストのとても印象的なディストーション・サウンドを生み出し、アンジェロは、イングヴェイやインペリテリ

等とはニュアンスが違うヘヴィな音を奏でる。

それに、リッチーはいつでも音が面白く、美しい。狂気のプレイをあの音でされたら、舞い上がってしまいそうだ。

今となっては、リッチーは過去の人物。もう聞くことは出来はしない。

なら、自分でリッチーを作ってしまえばいい。リッチー・サウンドと彰の嵐の様なプレイは、こうして生まれたのであった。

彰は、このサウンドプレイを『ブラックモスト・ミュージック』と呼んでいる。「Ｂｌａｃｋｍｏｓｔ（最高の黒）」のサウンドだ。

音も演奏も贅沢に。ここまでしないと気が済まない。そして、ここまで揃えられたのは、彰の努力の結果だ。

彰のサウンドは、彰に惹かれたローディーや技術者、そして、リッチー・ブラックモアのギターやアンプを改造していた「ドーク」の子孫が協力して出来た。感謝と尊敬の念を互いに抱く彼等は、最早「兄弟」と言っても過言ではない。

因みに、彰のアンプは殆ど改造されている。１９５９だろうと、１９８７だろうと、ＪＣＭだろうと。

「彰く～ん！」

クラクラちゃんを半音下げにした後、ピッキングで強弱を付ける手本を見せようとした時、ななかが彰に話し掛けた。ななかは自分の真っ赤なストラトを背負っている。

「彰くん、オーバードライブ貸して？」
「いいよ。確かコンテナに――」

言いかけた時、何人かの大人が彰に近付いてきた。
彰のローディーとギターテクニシャンだった。エフェクターやメンテナンスアイテムなどを渡しに来たのだ。

英語で彰とその人達が話しはじめた。ちょうど、ななかのオーバードライブの話をしている様だ。

「この子が、オーバードライブを使いたいんだって」
「使ってるのは73ストラトだね。ピックアップもオリジナルの、グレイボビンのやつかい？」
「うん」

今はガバナーで歪ませているよ、とまで付け加えた。

なら、とローディーはＡｎａｌｏｇｍａｎ　ＤＯＤ　２５０　をななかに渡した。イングヴェイ・マルムスティーンも使っていた、初期型の物である。

「コレハ、トテモイイオーバードライブデス」
「ありがとうございます♪」

慣れない日本語で、ローディーが説明した。ななかがそれを受け取りながら、笑顔でお礼をした。
「ななか、なんでオーバードライブに興味を持ったの？」
「ディストーションの歪みより、オーバードライブの方が好きになっちゃって。昨日、彰がやった『Ｎｅｖｅｒ　Ｄｉｅ』の原曲を聞いたら、そのギタリストの音がね」

イングヴェイ・マルムスティーンの音が気に入ったようだ。ななかはネオクラシカルメタル向きかな、と彰は思った。

「彰くんよりは遅いけど、あの速弾きも凄かったよ～。関連動画の『Ｓｅｖｅｎｔｈ　Ｓｉｇｎ』っていうのも、凄かった」

イングヴェイ屈指の難関曲である。大移動スウィープと連続スウィープ、そしてビブラートが肝となる為、テクニックと表現力が諸に出る。

彰はピッキングの強弱表現の手本を少し置き、『Ｓｅｖｅｎｔｈ Ｓｉｇｎ』の大移動スウィープを始めた。

「こうでしょ？」

「そうそう、それそれ！」

本人よりも滑らかなフィンガリングとピッキング。勿論、ピックの角度は垂直である為、粒が引き立ち、ノイズが少なく、そして一音一音綺麗にスタッカートが決まる。

「流石ぁ！！」

「ついでに、これでピッキング表現もしよう」

先程のスウィープを、デクレッシェンドとクレッシェンドの繰り返し。これにボリュームペダルでバイオリン奏法を加えれば、更にクラシカルになるだろう。

流石にこのソロ中にボリュームノブでのバイオリン奏法は難しい。出来なくはないが。

「流石彰、手癖だけじゃなく、一音一音、美しい表現だな」
「ありがとう。この音が作れるのも、貴方達のおかげだよ」

英語で話す彰。どんな演奏も、一人だけでは出来ない。いつもそれを忘れず、感謝の気持ちを胸に抱く。魔法の手癖は、ここからも作られている。

Ｓｅｓｓｉｏｎ　６　Ｒ．Ｍ．Ｂ．Ｃ．Ｆ

◆◇◆◇◆◇

クリパ三日前。彰のクラスは、練習も準備も着実に進んでいた。

放課後に、ななかと二人で、音楽室で別の曲を練習している。

この日の彰のギターは、５４年製のテレキャスである。３トーンサンバースト、ローズ指板の物で、ピックアップは純正品だ。

「これが、イオニアンで、特徴が――」

五線黒板に、音階とタブなどを解りやすく書く。この解り易さは、ななかレベルである。

「これで、理論は大抵終了」

「あとで、スケールブックも見せてね」

「うん。今日はおまけに、ペンタとブルーノートとか使って、ブルースやってみるよ」

Ｆｅｎｄｅｒ　Ｔｗｉｎ　Ｒｅｖｅｒｂ　のボリュームを上げ、トーンを穏やかにするため、トレブルブーストを切る。アンプのナチュラルな歪みを得ると、スローテンポで、ブルージーなアドリブソングを奏でる。

出力の低いピックアップで、クリアな美しいトーンを紡ぎ出す。決してオーバードライブやディストーションをかますようなことはしない。

ピッキングも、音の芯がなるし、とても太いネックから、ネックの鳴りが伝わってくる。

彰のブルースギターの手本は、エリック・ジョンソンやジェフ・ベック、エリック・クラプトンなどだ。カントリー、フュージョンもエリック・ジョンソンをヒントにしている。

また、スティーヴィー・レイ・ヴォーン、ロリー・ギャラガー、ジョン・メイヤーなども、ブルースの名手として好きだ。

フィンガーピッキング、ネックピッキング、カッティング、ディレイなども上手く使い、彰のブルースの世界観も生み出した。

次第に音楽室に人が寄ってきた。ななかが聴き入っているのと同じく、オーディエンスも魅了されている。

ビブラート、アーミング……。決して乱暴にせず、しかし、力強いアクセントを。いつもよりはスローだが、ほんの少しだけ速弾きも混ぜた。

「綺麗……」

気持ちいいくらい清々としたサウンド。最終的にはクリーントーンで攻められた。

「いい曲だ……。何て言うんだろう……」

「アドリブらしいよ？」

「即興なのっ！？」

ナチュラルハーモニクスと共に、アドリブ演奏を驚く。
彰のビブラートに惹かれる様に、観客も段々と増えていった。
――タップハーモニクスを入れてみよう……
ハーモニクスを多様するブルースは、あまりない。奇抜なセンスが随所に伺える。
ＺＥＰＰＥＬＩＮの曲のフレーズからも抜き出したりと、Ｒ＆ａｍｐ；Ｂなども演奏出来ることから、更に彰の能力の凄さが解る。
「よいっと」
適当に締める彰。終わった瞬間、オーディエンスが湧き、音楽室になだれ込んできた。
「あっらぁ……」
「凄い人の数だねっ」
倒れながらも拍手が鳴り止まない。ギターのノイズより騒がしい。
「ちょうどいいや。ななか、ギター披露しちゃいなよ」
「え？いいの！」
乗り気ななか。ダメなわけ、あるものか、と彰は言った。
「義之君に聞いたんだけど、この音楽室には、エングルのスタックがあるんだって。出してくるから、オーバードライブ出して待ってて。あ、僕のバッグにディレイとかもあるから、それも使っていい

よ」

◆◇◆◇◆◇

そして、ＥＮＧＬ　ＩＮＶＡＤＥＲのスタックを用意し、ななかのセッティングをする。ストラップはＦｅｎｄｅｒのモノグラムストラップ。シールドはＢＥＬＤＥＮ。

オーバードライブの聞き具合を調整し、アンプ側のドライブも確かめる。ＥＮＧＬはハイゲインなアンプだ。歪み方も強烈だ。

イングヴェイ似のトーンで、「Ｇｏｄ　Ｂｌｅｓｓｅｄ　Ｖｉｄｅｏ」。アルカトラスはヴァイ時代の曲だ。

殆どがタッピングで構成されている曲。ヴァイの超絶技巧が解る。

「よし、っと」

彰のミュージックプレイヤーをスピーカーに繋げ、ギターを抜いたその曲が流され始める。

彰自身はベースだ。音楽室のＡｒｉａ　Ｐｒｏ　ＩＩと、Ｇｅｎｚ　Ｂｅｎｚを拝借し、アンプのみで音を作り出す。

「せーのっ！」

ななかと彰の初ジャム。ジャンルを問わずにやれる彼らの実力。彰は言わずもがな、ななかのギターテクは、やり始めたばかりなのだが、なかなかの物である。

タッピングのノイズの少なさ。弦に垂直に、指先だけを叩き付ける。離すときも同様だ。

フォー・フィンガーピッキングの彰も見逃せない。正確なベースライン。ゴリゴリ響く低音。原曲より多い音数。

もしかしたら、今のななかは義之より上手いかもしれない。彰はそう思った。

2（前書き）

※美夏とななかのチートっぷりにご注意下さいw

2

◆◇◆◇◆◇

「どうもありがとう！！」

ギターを手に、周りにお辞儀するななか。彰はストラップにベースを吊したまま、観客と握手をしている。

「握手ありがとう！よければ、サインもください！！」

サインペンと色紙を渡され、さらさらと書き、渡す。このような、ファンとの関係を大事にすることに、ななかは尊敬した。

「彰せんぱーい！」

「あら、由夢ちゃん」

手を振りながら、彰にいることを示す由夢を見つけた。隣には、ホルスタイン柄の帽子を被った子がいた。

「友達？」

「はい。天枷美夏さん、って言います」

「美夏だ。よろしく、成澤。それより、凄いな」

美夏は敬語を使わないが、彰は全く気にならず続けた。

「ありがとね、美夏ちゃん。君は、楽器に興味あるかな？」

「ああ！弦楽器は、お前のを見て、特に！美夏もやってみていいか？」

「うん！はい、どうぞ」

ベースを美夏に手渡す。小柄な彼女と不釣り合いのように思えるが、格好なぞ問題無い。

「お前は、たしかこうやっていたよな？」

先程のベースラインを、寸分違わずやってみせる。周りから歓声が上がり、彰が拍手をして美夏を褒めた。

「おお！！附属の二年がすげえ！！」

「天才だよ、美夏ちゃん！もしかして、ベースやってるの？」

「いや、初めてだ。美夏の頭の中には、こういうのも……」

スリーフィンガーで、なにやら聞いたことのあるメロディーを奏でる。Ｄｅｅｐ Ｐｕｒｐｌｅの「ＢＵＲＮ」の、キーボードソロである。

更にどっと湧き、彰はテレキャスを出し、Ｔｗｉｎ Ｒｅｖｅｒｂに繋ぎ、バッキングを奏でる。

「なんだあいつ！」

「すげえぞ、彰君とユニゾンだ！」

「おお、ななかちゃんまでノッてきたぞ！」

美夏、ななか、彰のトリオ。何も知らない美夏とのジャム・セッションが、とても合っているとは思いもしなかった。

「イくよー！」

「イっちゃえい！」

ななかがギターソロに入る。原曲通りになぞり、開放弦を交えての速弾きから、トライアドフォームのスウィープをしてみせる。
覚えたてなので、流石に少し荒いが、それでも、彰の教え通り、きちんとミュートし音を分離させ、ピックを垂直に弾き切りながら、ノイズの除去と粒立ちを立たせる。

ところどころペンタトニックでアドリブを入れながら、ななかから彰へとソロを交代する。
彼もスウィープをするが、六弦の下降、上昇を織り交ぜている。

フリジアンから、ハーモニックマイナー、リディアンへの移行、そしてストリングスキッピング。

アウトサイドから抉るように弦を弾き、そのスキッピングをしながらラッシュをし始める。

「おい！！なんだあれっ！」
「すごい、手が見えない！！」

無影手の名のごとき速度。テレキャスでラッシュは合わないかもしれないが、それよりも速度のインパクトの方が大きい。

逆手スウィープから、エイトフィンガータッピングへ移行し、BURNの原曲をぶち壊した。
彰の曲にしか聞こえない。

タッピングの速度を上げつつ、ボディからネックを覗き込む様に持ち、変則スウィープタッピングを披露する。テクニック云々の領域ではない。腕力と空間把握能力能力の問題だ。

「変態だ！！変態がいる！！」
「しかも、カッコいい変態だ！！」

変態コール。その姿勢で、タッピングからピッキングに変え、またもやストリングスキッピングをしてみせる。変態から宇宙人へとコールが進化した。

「成澤ギター星から来た王様だ！！」
「すっごぉ！！」

最終的に、その体勢からラッシュをする。ギターの弾き方は決まっていない、と言わんばかりのスタイルだ。

ギターを投げ、背中越しにキャッチし、それでピッキング。速弾きで締めて、ピックを投げ飛ばして演奏を終えた。

「フリーダムだ！フリーダムさんだ！」
「成澤くんも白河さんも凄かったけど、あの女の子は何者なの？」

アマチュア二人、しかも初心者が、ここまで合わせられるとは、誰が思っただろう。

セッションの仕上がりに感動したのは、観客だけでなく、彰達もだった。
「美夏ちゃん、やるじゃん！」
「成澤には及ばんさ。しかし、白河も流石。成澤に教えて貰ったことはあるな」
「いやぁ、私はまだまだ未熟だよぉ」
謙遜するななか。そんな所を見せ、ななかのギターのファンは増えていく。

「ななかちゃん、ソウルなギターありがとう！」
「今まで外見でファンになってた！ごめん！魂のギターの虜になった！！」
色々な声が聞こえるが、人気が上がったのは事実だ。しかも、技術面を見たファンの。

「成澤くん！これからも、白河さんのギターを宜しく！！」
「天枷ぇっ！！お前も、成澤君にベース教わって、更にすげえもん見せてくれよぉっ！！」

美夏にも新たなファンが増えた。人間嫌いな彼女ではあるが、どこか心地好い感じがした。

「上等だぁっ！！クリパで、美夏のグレードアップしたベースを見せ付けてやる！！愉しみにしてろよっ！！」
「いいね、その強気な発言！！カッコいいぜ天枷！！」
「天枷さん、白河さん、頑張ってねっ！！」

彰のやる事が増えそうだが、それでも嫌な気はしない。楽器を教えることは苦にならない。
「成澤先輩も、頑張って下さいねっ♪」
「ありがとう、由夢ちゃん。いやあ、教えがいがありそうだ」
ニコニコと笑う彰と由夢。
また一人、彰に弟子が増えた。

「3（前書き）

書いてる途中で何がなんだかわからなくなったｗｗｗ

「3

◆◇◆◇◆◇

ななかと共に家に帰って、スタジオに真っ先に入る。ホワイトボードを出して、マーカーで何かを書き出した。

「さて、ななか。今までやった理論に、更にもう一つ加えるよ」

ホワイトボードには、『R．M．B．C．F』と書かれている。ななかが頭を傾げた。

「なにそれ？」

「これらはジャンル。これにあった演奏をする時、頭の中で考えることなんだ。Ｒｏｃｋ、Ｍｅｔａｌ、Ｂｌｕｅｓ、Ｃｏｕｎｔｒｙ、Ｆｕｓｉｏｎ。頭文字だね」

多彩なジャンルを演るための、彰のスタイル。彼は必ずこれに基づき、そこから派生させる。

「ギターを教える時も、僕は必ずこれを考えていた。最終的に、これを君にも教える。まあ、これは勝手に身についていく物なんだけどね」

「へえ……。これをマスターすれば、大抵のジャンルは演奏出来るの？」

「うん。これは、誰にも教えてない、じいちゃんもばあちゃんも、雑誌も知らない。本当に教えたい人にしか教えないんだ」

「えっ？」

――なんで、自分に教えるのだろうか？

とても疑問に思う。ななかは、彰の眼を見た。

「どうして、私に教えてくれるの？」

「君は、僕よりもギターの表現力を引き出せると思ったから。後は……。君は、ここでの初めての友達だから」

かなり期待を寄せられている。そして、私情もかなり入っている。しかし、ななかが思っていたこととは違った。

「それだけ？」

「うん」

「な、なんだぁ……。そっかぁ……」

あはは、と笑いながらも、ぽろぽろと涙を零す。彰が驚き、ななかに声をかけた。

「ななかっ！？僕、なんか悪いこと言っちゃった！？ごめんねっ！？」

「ち、違う……。彰くんは、何も悪くないよっ……」

「あわわっ……」

動揺する彰。どうしたらいいのか判らない。

「私でも、何で泣いてるのか判らない……」

「え、ええっ……」

手の付けようが無い。彰は困った顔をする。

ななかは彰に抱き着き、顔を隠した。更に彰が困る。

「ななか？大丈夫？」
「彰くん……」
「タオル持ってくるね？顔拭いて」

ななかを優しく離し、ゆっくりとタオルを持ってくる。その動作は、どこか挙動不審だ。

「はい、タオル」
「ありがとう……。ごめんね」

彰は動揺がまだ隠せない。身近な女の子が泣いたのなんて、始めてだからだ。

ななかがＭａｊｏｒのスタックに寄り掛かり、膝を抱えて座っている。
彰もそのスタックに顔を突っ伏した。スラントの右上のスピーカーに顔が当たる。

「ごめんね、ななか……」
「彰くんは何も悪くないよ……。泣いちゃって、ごめんね」
「いや、僕に落ち度があったんだよね……。僕の気が付かない所で、ななかを傷付けちゃった……」

彰がななかの前に正座で座り、頭を地面に付ける。土下座である。

「あ、彰くんっ！？」

「ごめんなさい……。もう、傷付けないから……」
「いやいやっ、違うからねっ！？顔上げてよっ！！」
その通り、顔を上げ、ななかを見た。
「彰くんは、本当に、何も悪くないんだよ？私は……」
「え？」
「本当に、私もわかんないんだよ。嬉し泣きなのかもしれないけど……。悔し泣きかもしれない」
何が悔しいのか、ななかも、彰も判らない。彰がまた困惑する。
「色々と困らせてごめんね？」
「……いや、いいよ。考えすぎるのは、僕の悪い癖だから」
「なんか、謝ってばかりだね、今日は」
ななかが軽く笑う。そして、彰の頭を撫でた。
「何がなんだかわからないや、今日」
「うん……」
座りながら話す二人。彰は脚を伸ばし、後ろにあるギタースタンドに寄り掛かった。ヤイリのギターがちょうど頭にある。手に取り、F7を押さえた。
続けて、Ｂｌａｃｋｍｏｒｅ'ｓ　Ｎｉｇｈｔの「Ｍｉｎｓｔｒｅｌ　Ｈａｌｌ」を弾きはじめる。心を落ち着かせたいときに彰が弾くナンバーだ。
心地好いナイロン弦の響き。優しい音色に、ななかは心を奪われ

た。

――私は、彰くんが好きなのかなぁ……？

友達という言葉に引っ掛かった感じもした。心に靄が生まれた気がした。微かに、誰かの顔が見えた気がする。

そんなことを考えながら、蘇った中世の音楽家の旋律に、ななかは浸かっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8237s/

D.C.II-Long Live Rock'n'Roll-

2011年11月29日22時45分発行